

投稿

モーツァルト没後二〇〇年に『モーツァルト』 …… 平野 達也 4

“現代思想の快楽”そのⅢ …… 松原 恵二 8
『ダダ屍体解剖』その3 〈現代日本詩は如何に〉

連載

おいてけぼり——宮本輝試論 IX …… 芝田 啓治 16

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート XIV

学校の再建と公立化運動 …… 梁 永厚 24

研究余滴 象徴主義 7 第2章 象徴主義の先駆者たち

Ⅳ ステファヌ・マラルメ (1842~98) …… 山村 嘉己 38

日本中国ことばの来往 ゆきざら その43 …… 芝田 稔 51

周作人と周辺の人びと——一九四九年以降における——

短評

『国境を越える労働者』 桑原 靖夫 (岩波書店) 58
『有害』コミック問題を考える』 『創』編集部 (創出版社) 60
『娘に語る祖国』 つかこうへい著 (光文社) 62

羅針盤 2
スタッフ募集のお知らせ 23
投稿募集のお知らせ 63
編集後記

題字 ■ 網干善教 (文学部教員)

1992. 1 羅 針 盤



「アジアで、日本は何をしたのか」——近現代史を語る時、決して忘れてはならない事がある。日本帝国主義が「大東亜共栄圏」あるいは「八紘一宇」を目指して行ってきた、残虐な所業の数々。侵略の歴史の事実を、私達は忘れてはならない。

現在、私達が受けている「歴史教育」は、ほとんどの場合、近現代史を前にして終わってしまう。丁度第一次世界大戦前後から、「あとは各自で読んでおくように」と指示された記憶のある人は多いだろう。

一九九一年一月八日の朝日新聞によると、日本人の五人に一人は、日本の朝鮮に対する植民地支配の事実を知らないと言う。

現在、日本の植民地支配の結果生み出された問題について、戦後補償を求める闘いが方々でくり広げられている。在日韓国・朝鮮人の永住権を始めとして、従軍慰安婦、強制連行、BC級戦犯等、枚挙にいとまがない。

これに対して、日本政府は「一九六五年の日韓条約ですべては終わったはず」だとか、挙げ句の果てには「政府ではなく、民間業者がやったこと」などと言いつけている。そして、先にも述べたように、日本人の多くが侵略の歴史はないと思っている。時には「過去の実態を調査するより、今の日韓関係を志向するべきだ。ノテウ

大統領も来たし、天皇も謝罪したし』等という見当外れの意見もある。

過去の実態を覆い隠したまま進められる「日韓関係」とは何か。現在の、戦後補償を求める闘いは、隠されてきた歴史を明らかにすることなのである。虐げられてきた人々に対する謝罪なのである。それはもちろん、政府間で文書を取りかわして、ハイ終わり、という性質のものではない。人権を侵され、戦後四十五年経った今でも、生活に苦しむ当事者に対する具体的補償が求められている。

日本では、数多くの在日韓国・朝鮮人が生活している。戦時下において、強制連行されて来た人の子孫、戦後、朝鮮半島へ帰ることのできなかつた人、つまり、日本の植民地支配の結果生み出された人々である。今では、日本で生まれ、育ち、日本語しか話すことができな人が増えている。しかし、外国人登録法によって管理され、国籍条項による法的就職差別を受けている彼らの姿は、私達に見えにくい。いわれなき差別を受けている彼らにとつて、戦後補償は終わっていない。そして、終わらせていないのは日本政府であり、私達の歴史認識もまた同じである。

在日韓国・朝鮮人が民族名を名乗ることができず、通

名（日本名）で生活しているのはなぜか。「創氏改名」を歴史として学んでも、今なお続いている事実を知っているだろうか。また、日本人の差別意識が、民族名での生活をはばんでいるのだ。「大丈夫。日本人と変われへんよ。彼らが望んでいるのは、日本人に見えるような生活」ではなく、「在日韓国・朝鮮人としての生活」なのである。

現在、日本政府が行っていることは、「日本で住むなら日本人の様に生活しろ」という事であり、そのために、様々な、国籍による差別を行っているのだ。

日本の植民地支配の結果生み出された、様々な問題を抜きにして、今後の「日韓関係」は語れない。「国際化」なんでもつての他である。

過去の侵略の歴史を認識し、それらの具体的補償をしないことには、日本政府はいつまでたつても「国際化」という言葉は口に出来ない。民衆に対して、「侵略」を「進出」と書いてごまかしている様ではダメなのである。

そして私達も、口さきだけの「国際化」ではなく、真の「国際化」を足元から始めよう。

投

稿

モーツァルト没後二〇〇年に『モオツァルト』

平野達也



一九九一年。昨年は、モーツァルトの没後二〇〇年にあたった。内外を問わずモーツァルトの音楽がくり返し演奏された。お祭り好きの日本では、世界のどこにもましてモーツァルトが取り沙汰されていたようだ。このブームは、間違いなくマスコミのつくり出すものであるが、一体没後二〇〇年に当て込んでどれ位モーツァルト関係の催しがあるのかと軽い気持ちで調べようとはしたものの、とても調べ切れないことなどすぐに解るほど、その数は多かった。

因みに、昨年一年間の『音楽の友』で、見出し二〇項目中モーツァルト関連のものは、二項目を下らず、

ルツブルク・ウィーン 1991年モーツァルトライ
ブノ 音楽ファンなら今年こそノ (オースリア政府観
光局広告・三月号) という観光案内まで出る始末。また、
「モーツァルトは女だったのです。―マドマアゼル・モ
ーツァルト(びあ11/21号) というミュージカルの広告。
猫の高級缶詰のテレビコマーシャル。『ピアーはスタイ
ウエイ、音楽はモーツァルト、缶詰は〇〇。』このコマ
ーシャルは、没後二〇〇年とは関係がないけれども……。
僕も演奏をする機会があつてゴタブンにもれずモーツ
ァルトを取り上げたが、そんな時思い出したのが小林秀
雄の『モーツァルト』だった。

——ゲオンがこれ (ト短調クインテット K・五一六)
を *tristesse alante* (トリステス・アラント 疾走する
かなしさ) と呼んでいるのを、読んだ時、僕は自分の
感じを一言で言われた様に思い驚いた。確かに、モオ
ツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない。
涙の裡に玩弄するには美しすぎる。空の青さや海の匂
いの様に、万葉の歌人が、その使用法をよく知ってい
た「かなし」という言葉の様にかなしい。——(モオ
ツァルト)

戦後間もない昭和二十一年十二月に雑誌『創元』に発
表されたこの小林秀雄の『モーツァルト』は、それまで
ベートーベン一辺倒だった日本人の音楽観を変え、今日
のようにモーツァルト愛好家が増えるきっかけとなった
作品である。

しかし日本人は所謂かなしいものが好きである。日本
人は短調愛好家である。(多湿風土のなせるワザか。)恨
み節演歌。アメリカでは流行らなかつたバド・パウエル
の「クレオパトラの夢」。さらに癖の悪いのが、そのか
なしい曲調の上に、モーツァルトなどの天才の悲劇を重
ね合わせてしまう。このような典型的短調愛好家として
小林を批判して……

——たしかに、モーツァルトにおけるかなしさは非凡
であるが、小林秀雄の対象は余りにも器楽の短調曲に
偏重しているのではあるまいか。かなしさは短調にの
みあるのではなく、長調の中の一瞬の翳りこそモーツ
ァルト特有の表現であり、しかもかなしさと表裏をな
す彼の陽気な笑いや音の遊び、あるいは生きている喜びの
ようなものが小林秀雄からは伝わってこない。——(レ
クイエム小林秀雄『疾走するかなしさ』高橋英郎(音
楽評論家))

しかしこの批判は、すぐに崩れる。

—— *tristesse* を味わうために、涙を流す必要がある人々には、モーツァルトの *tristesse* は縁がない様である。

—— (モーツァルト)

小林は、モーツァルトの短調が、短調故にかなしいと感じるのではないことを示している。また、書簡などからモーツァルトの明るさも知っていたし、その明るさを裏返しに見て、かなしいと思うようなロマン主義的鑑識眼は、モーツァルトの音楽を曇らせるだけだということもわきまえていた。小林のモーツァルトへの洞察はもつと深い。小林は決して短調愛好家などではない。

しかし僕のように稚拙ながら作曲や演奏を通じて音楽を内から見る者にとって小林の文章は（たとえ彼の批評は文学であると解ってはいても）、余りにも自己中心的な感動体験記を、美しい文体で包み込んでいるだけのよう
に思え、音楽における専門的・学術的知識のない者が、
どうしてここまで語り得るものかと抵抗さえ感じた。

しかし小林は自然態である。

—— 僅かばかりのレコオドに僅かばかりのスコア、そ



れに、決して正確な音を出しながらぬ古びた安物の蓄音機、—— 何を不服を言う事があるう。—— (モーツァルト)

—— (ワイゼワというモーツァルトの研究家の姿勢を見て) 音楽家の正体を掴む為には、何を置いても先ず耳を信ずる事であつて、その伝記的事実の如きは、邪魔

にこそなれ、助けにはならぬ、(中略)〔そういう研究家の姿勢に〕多くの啓示を得たのであった。——(同)

また、先の高橋英郎に対して、——「モーツァルトについては、もう書きたくないね。今度音楽について書くときはうんと勉強してちゃんとした音楽論にしたいと思うな。」——と語ったという。

ここには、知識人としての銜てふいなど微塵もない。ただそこにあるのは、モーツァルトを愛して止まない一人の人間である。

音楽に限らず、芸術作品にとつて、鑑賞されることは、やはりありがたいことである。いまだモーツァルトの音楽を知らない人、また、日頃聴いてみる機会のない人達へ興味を促すという意味では、昨年のモーツァルトブームも価値のあることだと思ふ。だが僕等の前にあるモーツァルトの音楽を味わうのは僕等自身であり、金または耳の筋肉を使う代償として何かしらの充足、満足があるべきだろう。心に入ってくる音楽的感動そのものまでをも、評論家の文句や、コマーシャルコピー通りでよいものか(本物なんてそうありやしないし、人に言われなくてもその辺に転がっている)。

『モーツァルト』の *tristesse altorne* (疾走するかなしき) という言葉は、なるほど小林の感動の本質をついた表現ではあったのだろうが、この文学的表現の美しさとモーツァルトの本来の美しさとはどこまでもその本質を一にしない。その裡に隠されてしまう本来のモーツァルトの美しさがあつてはならない。それと感動誘発剤としてのコマーシャルコピーとどこが違うのか。

ト短調のアレグロを前にかなしと思つた小林がいたことは確かである。そこにいたのは、知識人小林秀雄でもないし、近代批評の確立者小林秀雄でもない。

学ぶべきは、小林と同じようにかなしいと思ふことではなく、小林のモーツァルトに対する無垢な姿勢である。

天才の没後二〇〇年に吹き荒れたブームは、今や見る影もない。一過性の熱に浮かれたバカ達によって引き出され、チャホヤされたモーツァルトは、また静かに、もとのところに横たえられた。

一九九一年。昨年は、モーツァルトの没後二〇〇年にあつた。(ひらの たつや・法学部五回生・ジャズ研究会)

投

稿

現代思想の快楽

そのⅢ

『ダダ屍体解剖』 その3

〈現代日本詩は如何に〉

松原恵二

現代日本詩はどれくらいダダしているのか？ これは非常に難解な問題である。フランスダダイズムが《反芸術》や《反詩》といったアンチテーゼの御旗のてっぺんにみずからを置いたということは『現代思想断の快楽Ⅲダダ屍体解剖 前編』にて記したつもりだが、ただ厄介なのはツアラを先頭にしたフランスダダイズムは政治イデオロギーの問題までに関与することを欲したことだ。そのことは後の、シュールレアリスト達のマルクス主義やトロツキーをスターリンから擁護した事件を鑑みれば判然としている。ここではシュールレアリズムは関係ないが、ダダにも芽ばえていた政治的色彩、このひとつの

流れもダダイスト達の詩に少なからずの影響を与えていたことは否定し得ないだろう。それに、イタリア未来派のジャコモッティは何よりもまずファシストであり、彼の詩は彼の思想の具現である。この政治思想と、彼らの創作行為の相互作用を切り離し得ることなくダダイズムがあり、その事柄を踏まえてダダイズムを考えなければならぬ。私が「厄介だ」と言ったのは、この傾向が日本の現代詩にはほとんど見当たらないからだ。それでは一度、この「厄介さ」を考慮したうえで、形式臭いがダダイズムの概略について明確に論じている文献をもってダダイズムの定義とする。

“Anti-literature” “Anti-poetry” and “Anti-art”, that is, DaDa, denied the universality of the values produced by human history, and followed its desire to “zero” everything, to completely raze the whole scene, and thus be able to start afresh culturally, in an adventure dominated by an individual's freedom and spontaneity, where full reign could be given to the unpredictable and aperperity



〔反歴史性〕〔反文学〕〔反詩〕そして〔反芸術〕、ダダは人類の歴史が生み出した価値の普遍性および永遠性を否定し、全てを「ゼロ」にし、全ての状況を完全に破壊したいという欲望を追求し、その上で自然自発的な冒険をするなかで可能であるとした。そこでは予知不可能なもの、そして非論理的なものに絶対的な力が与えられた。（訳松原）

この定義に少しばかりの不満と補足は必要であるが、ダダイズムの一つの側面としてはかなり要を得ているので、これをDADAの墓碑とし、そしてこの観点から現代日本詩のダダイズム性について記して行きたいところとは思っている。

一九二一年（大正十年）、日本で平戸廉吉の『日本未来派宣言運動』というピラが撒かれた。

顫動する神の心、人間性の中心能動は、集合生活の核心から発する。都会はモートルである。その核心はダイナモ―エレクトリックである。

このように、産業革命、技術革新のあとの機械文明が

到来したと告げられ、日本での前衛芸術、つまりダダイスト新吉が蠕動する。日本の文学史上、ダダ詩人は中原中也であるが、少しでも現代詩を読んでもみると高橋新吉の詩の輝きに目玉をみはるはずだ。例えばこのような詩はどうか

皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿

倦怠

額に蚯蚓這ふ情熱

白米色のエプロンで

皿を拭くな

鼻の単の黒い女

其処にも諧謔が燻すぶってる

人生を水に溶かせ

冷めたシチューの鍋に

退屈が浮く

皿を割れ

皿を割れば

倦怠の響きがでる。

この無敵な詩人高橋新吉は禅宗の哲学に傾いていた。彼の自伝によると二十歳くらいの時に解深密経や維摩経



という経を誦んで、仏教に魅せられたらしい。そして東洋思想としての《禅》と西欧思想としての《DADA》の共通性を知り、《DADAは禅の亜流にすぎない》とダダイズムを放棄した。

その、ダダイズムと禅宗の同一性とは何であるのか。禅宗には不立文字ふたつたふじぶんという哲理がある。これは、文字や言葉は人間が仮に作ったものであって法を伝えるものではなく、心でもって心に伝えるのであるとの教えがそれぞれである。「此の事は決定して言談の相を離れ、心縁の相を

離れ、文字の相を離る」というのだ。ダダの詩は、反イマジユ性で、言葉の意味を脱臼させ、文字を解体し、言語の枠を破壊し、言葉を物質的単位として使うことによつて、「無限とか無とか、それはタバコとかコシマキとか単語とかと同音に響く」と考えたのである。この点において《ダダは禅の亜流にすぎない》と詩人高橋新吉に喝破されたのだ。

後に高橋新吉はこう書いている。「私はダダイストの詩人として出発したが、数年ならずしてダダイズムを自分では棄てて了つたのであるけれど、今なおダダの詩人などと呼ばれて、ゾツとすることがある云々」。しかしながら、高橋新吉が日本での優れた同時代のダダ詩人として一九二〇年に出発したのは事実であり、高橋新吉の詩がダダであることも否めない。

余は腐爛せる太陽の濃漏の中に蠢動する宇宙的能力の総てに対して反対を宣言する——ダダは未来の放棄である——ツァラ

西欧の顛覆した神の秩序にかわる、新しい倫理を、高橋新吉はこの言葉から感得したのである。

* * *

戦後、現代詩は吉岡実が高峰をなしたと言われている。鮎川信夫の有名な「死んだ男」

たとえば霧や

あらゆる階段の跽音のなかから

遺言執行人が、ほんやりと姿を現す。

——これがすべての始まりである。

この遺言執行人によつてモダニズム詩が否定され、吉岡実によつて現代詩の前衛となるべく真摯で強靱な詩集『静物』が生まれる。

夜の器の硬い面の内で

あざやかさを増してくる

秋のくだもの

りんごや梨やぶどうの類

それぞれは

かさなつたままの姿勢で

眠りへ

ひとつの諧調へ

大いなる音楽へと沿うてゆく

めいめいの最も深いところへ至り



核はおもむろによこたわる

そのまわりを

めぐる豊かな腐爛の時間

いま死者の齒のまえで

石のように発しない

それらのくだものの類は

いよいよ重みを加える

深い器のなかで

この夜の仮象の裡で

ときに

大きくかたむく

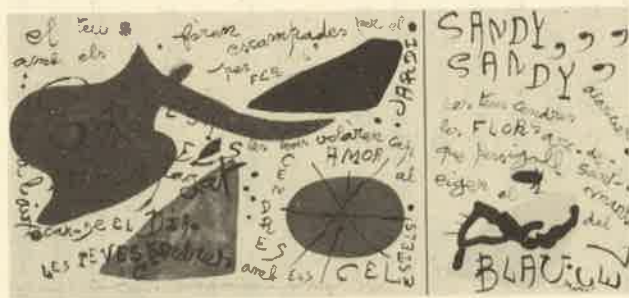
私の友人がこの作品にセザンヌの風景画を垣間見たように、吉岡実の詩には絵画的、彫刻性が大きくある。特にこの『静物』においては傾向が顕著である。このことを

詩のオブジェ化作業とある評論家は言っている。

またときに、吉岡実の詩はグロテスクで猥褻で、滑稽でもある。二日酔いの苦痛の後に排泄された生々しい嘔吐物である。

またあるいは、吉岡実の詩の音楽性というものについても言われる。「彼はめずらしいサンボリストで、意味やイメージよりは、実際は音楽性にかけているのではないかと思はれる」と飯島耕一は絶句しているくらいだ。ただ、絶句はしているものの、つまるところその音楽性とは、語の強弱によって醸し出されるリズムであるのか、はたまた息もつかせぬ文体で彩られたテンポであるのか、またあるいは中原中也ぶしのメロディのことであるのか、残念ながらその問題については等閑に付されたままなのである。

母親のねむった後
死児が床を這い廻る
果ては
春の嵐の海を埋めつくす
死者のうわむきの顔の上で立ち上がり
次から次へと
跳ね歩く死児
凌辱された姉を求めて
ただ一人の姉でなく多くの姉の
波の魂に呼ばれて
陰気な蓮華をかざして行く
腿の柱をきよめに
混血の海へ
姉が孕み
姉が産む夥しい死児の祝祭
輝く王道をきりひらき
古代の未開地で
死児は見るだらう
未来の分娩図を
引き裂かれた母の稲妻
その夥しい血の闇から
次々に白髪の死児が生まれる



何よりもまず、吉岡実は芸術至上主義者であったのだが、如何せん彼の詩がDADAであるか否か？ DADAの運動が文学史上のひとつの実験的な範疇内のものだと考えるのなら、吉岡実の詩はその意味においてDADAであると言える。なぜなら、吉岡実は古典作品に全

ての特権を譲歩しなかったからだ。だがこのことについては、詩人とはDADAである」と記すほうがより正当ではある。

次に、言葉の論理性という点において吉岡実の詩はDADAであるか否か？ この疑問には甚だ簡単である。

吉岡実の詩は極めて明晰な論理——形式論理性、弁証法論理性——でもって統一されている。それ故にDADAであると言うことはできない。

しかし、右に記した詩を読んであなたは何を感じとることができたか。生と死の表裏一体性が強烈なまでの凄まじいコトバの前衛性を感じとることであろう。DADAは特権的な階梯にある芸術に対してのアンチテーゼで



あるかも知れないが、そして吉岡実は芸術至上主義者であつたかも知れないが、吉岡実はDADAであるという結論を感じとることはできないだろうか。つまり、吉岡実は、まことしやかにスキャンダルな詩人であると言う他に評しようがないのだ。

* * *

DADAとはほとんど関係ないと思うのだが、鮎川信夫について、彼の詩についてももう少し触れておきたい。

深夜 唇が煙を挟んでいる

とぎれた部屋に心臓の羽搏きが

左右に広げる黒い蔭ノ 二重のドアノ

孤独な生きもののため

耳をすましている中樞に

つかれた椅子の軋る音……

重たい時計の振子の音……

頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……

頬骨がつめたい空気のみかで尖ってくる

不図した思考が

うなだれた水仙の覽しげな影を卓布に落す

鏡がひやかに自虐を睨む

私は怖れる

古風な銀の縁をつけ　いつもこの水が動かぬことを

……
自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……

大きく見ひらいたうつろな眼の

おとろえた視力の闇をとおして

臃ろに姿を現すこの髭だらけの死者は誰だろう

「貴方の死と一緒に、戦後詩の偉大な時代が確かに終りました」。これは吉本隆明の弔辞である。そしてこの弔辞は弔辞である以上に、時代の流潮をしかと見据えた現代詩批判でもあることに気づくはずだ。

私が思うに、鮎川信夫の詩は虚無の感情やペシミステイクな快活に満たされているようだ。レトリックの問題を別にすれば、少しばかり婉曲な言いかただが、戦争体験を通じて詩人の社会的責任によるものだと鮎川信夫自身の弁に、彼の虚無性のペシミスティックな性質が裏付けされるだろう。

他の観点から見て、鮎川信夫の詩は理知的で良識的で、さもそうであるかのような論理でもって我々の主観を詩の中に誘い込む。当然のことながら、彼特有の詩法があり、特有のヴィジョンが創りあげられているからである。私は鮎川信夫の詩について（残念ながらその他の詩人に

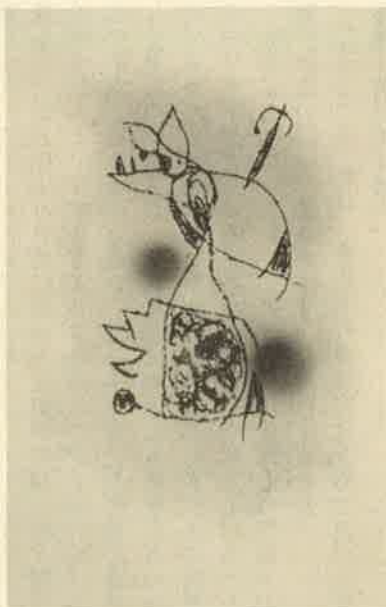
ついてもそうなので、その点における怠惰は大いに認める）緻密な分析を行ってはいないが、いずれにしても鮎川信夫の裡に秘められている重層な言葉を解説して行く必要はあるだろう。

* * *

現代詩の最たる前衛について、私はここでは伊藤比呂美の『テリトリイ論』、朝吹亮二の『OPDS』、稲川方人の『二〇〇〇光年のコノテーション』、ねじめ正一の『下駄履き寸劇』、そして正津勉の『冬の旅』と記す。

（つづく）

（まつばら　けいじ・社会学部四回生）



連

載

おいてけぼり

宮本輝試論 Ⅸ

芝田啓治

九、「おいてけぼり」苦悩とその救い（その二）

(4) 宮本輝と宗教

前回のその1に於いては太宰治の宗教についてみたが、宮本のそれは「家」の所でみたように、やはり太宰とはかなり離れた所で、又方向性も全く異なる向きで進んだものと言える。

太宰の場合、窮地に追いつめられた時「死にたい」と結論付けたのは説明した通りだが、その死に向かう生の中でイエスに出会ったのであった。又、走り続けるメロスに対して、滅び行く実朝に対して、太宰は結局の所理想

像として、この三人を仰ぎ見るのであった。自分の生は、果して、三人のように死に向かう生の中で精一杯、明るく生き抜くという生き方と共有出来るのかを問い続けるのである。古いものと闘い、闘う事で自己の存在を確認して来たのであるが、それは強固で揺るぎのないものであった。結果的には敗北を味わうのだが、その敗北の中で真実の青空の爽快さを感じようとするのであった。

太宰にとって、苦悩。これが、実は信仰なのであった。救いのない信仰。苦悩の中で、如何に生きるか。

「キリスト。私は、その人の苦悩だけを思った。」（太宰治「苦悩の年鑑」）

「日蔭者の苦惱

弱さ。

聖書。

生活の恐怖

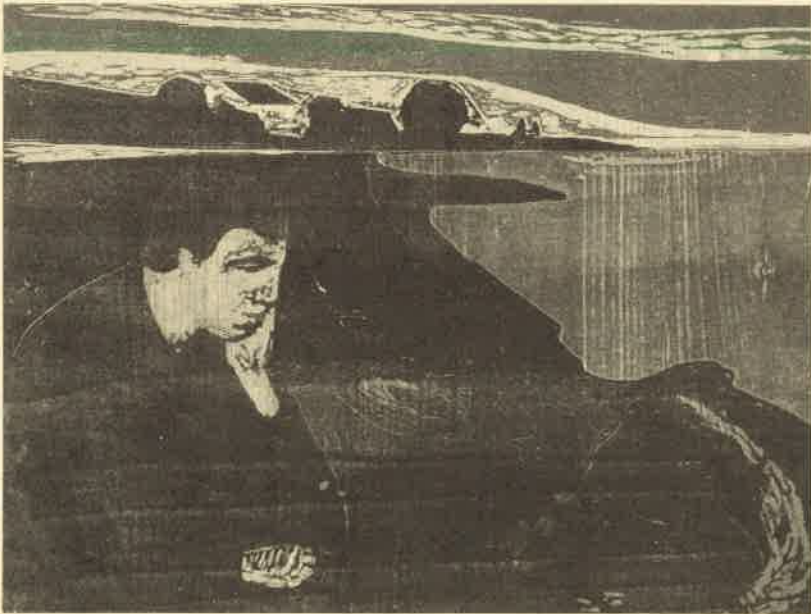
敗者の祈り。」(同「如是我聞」)

それに対して、宮本輝の場合は、没「うち」からスタートを起こす事になる。家もなく、故郷もなく、母と共に父から「おいてけぼり」を喰うはめになり、ただ残さねたのが父の負債のみであった。自分が失うべきものがないもない。そのような窮地に追詰められた時、宮本は狂気の中をさ迷う事になるのであった。

「私は五年間勤めた会社を昭和五十年の夏に辞めた。二十七歳のときだった。その二年前から強い不安神経症というノイローゼにかかって、サラリーマン生活に耐えられなくなっていた。」(宮本輝「改札口」)

「私も同じ病気で、二十五歳の時からずっと苦しむつづけてきた身として、彼女の心に生じた不安の根源が何であるかよく判る。私はそれを「死ぬの、怖い怖い病」と名づけている。だが死への恐怖は、ある一瞬、人間に大いなる歓喜の正体を見せることもある。」(同、「潮音風声」「人間の不安」)

宮本は、闇の中腕き苦しむ中で一つの結論に行き着い





たのである。「死にたくない」と。彼は、失うべきものをすべて失い、ただ残されたのが自分の生命であると気づき、開き直るのであった。死への恐怖感や狂気への恐怖感に苛まれた時、彼を根底で支えたのが、次の言葉である。

「生まれつき体が弱かったことと、二十五歳のとき、突然不安神経症という病気にとりつかれた私は、自然に死と隣り合わせのような心境で今日まで生きて来たのだと思う。だから、若死にをすれば、生きている犬にも劣るという日蓮の言葉は、残酷なまでに私を打ちさえると同時に、不思議なほどに叱咤してくれる。どんなことがあっても、この世での自分の仕事を成し終えるまでは、生き抜かねばならぬ。そう強く己を鞭打つのである。」

(同「潮音風声」『覚悟』)

彼の様々なる恐怖を、この言葉が救うのである。太宰が宗教を、生き方の上で理想像として、追い求めたのであった。イエスやメロスや実朝の姿に、生き様に自ら歩み切れない理想を託したのであり、結果的にはやはり歩み切れなかったのであったが、それに対して、宮本の場合、理想像と言うより現実対応の術として宗教を考え、かつ歩み始めたのであった。「死にたくない」から「生きたい」へ、そしてその「生きたい」を支える原動力と

して、日蓮の言葉を置くのであった。

日蓮は、鎌倉時代中期、念仏宗の後衝撃的なデビューをし、活躍した人である。法華至上主義を唱え、他宗派を徹底的に批判したのであった。念仏宗を信ずれば無間地獄に陥るとか、禪宗は天魔であるとか、真言宗は国を亡ぼすとか、律宗は国賊であるとか、そして日蓮宗同様法華経を重んじる天台宗は過時として、その鋒先を緩めているが、他宗派に対しては一切容赦がない。

又、鎌倉幕府に対しても、日蓮宗を国教とせよと迫るのであるが、聞き入れられず、流罪となるといった具合に徹底しているのが、この宗派の一つの特徴と言えよう。法華経は、「真理・生命・実践」を重んじているが、その実践の中には、殉教や殉難をも敢えて厭わずといった流れがあるのである。しかし、我々は歴史の中で、又現実の中で、国家宗教の愚をいやと言う程見てきたように思える。信教の自由は保障されなければならないが、それは他者に対しても最大限同等に認めるという前提なしには存立しないはずだが。

現在も「添書登山」更には、「解散勧告」といった問題が起こっているようだが、この宗派の持つ狭量さは自戒すべきだと思われる。その事は、作家宮本に対しても言えるのではないだろうか。

「私は、なぜ人間は生まれながらに差がついているのかという命題に深くかわわつていこうと思う。それはもはや宗教の領域ではあるが」(同「宿命という名の物語」)

「運命というのは、偶然性に左右されたものでしょう。自分の意思とは無関係に与えられたもの。しかし、宿命というのは自分が背負っているものですよ」(同「スポーツと文学」)といった所に文学としてのスタート台を据え、宮本は歩き始めるのである。それは誰しも持つ、かつなかなか答えの得られない命題でもある。それゆえ、文学の立脚点にこれを据えるという事は、極めて深淵かつ普遍的なものであり、一層強固なものに成ると言えよう。この観点から生老病死を扱ったり、愛情や恋愛、屈折や葛藤を扱う所に、その深みを感じずにはいられない。他者との比較にはなく、自己探究の術としてのみ宗教を用いなければならないし、他の利用は厳に戒めなければならないだろう。

「他の宗教は全部、阿弥陀仏をつくったり、観音仏をつくったりして、つまり仏というのは外にあるとして、それを拝んでいるわな。キリスト教だってそうでしょう。外にある神様ですよ。しかし、仏性、つまり無辺の創造力をもって、無量の生命力と蘇生力をもった人間というのは自分の中にもすこい力を持っているんだ、それが

仏ということなんだと『無量義経』で明かした上で、法華経に入ったわけです。」(同「物語の復権」と結論付けると、一方通行の見方に陥る危険性に注意しなければならぬだろう。

浄土真宗に対しては、「青が散る」の中で、次のように批判している。

「敗北の宗教や。……この世でしあわせなんか望めん、とても地獄は一定すみかぞかし……念仏を唱えて、死んだのちに西方十萬億土の彼方の浄土でしあわせになれるという思想が栄えたんや。」と結論付ける。親鸞は決して彼の言う教えのみでなく、「後生の一大事」という事を唱え、今を如何に生きるかを自己に徹底して問い掛けた宗教家でもある。

又、キリスト教に対しても、「海辺の扉」の中で、宮本はその批判を展開している。

「ヨーロッパ文明の滅亡は、すなわちキリスト教文明の崩壊だって気がするんです。つまり、キリスト教の役割は終わった。」

誰が、キリスト教を外にある神様を拜む宗教だと規定出来るでしょうか。最も内にある宗教かも知れません。

「あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない」(出エジプト記二〇章四節)

「偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことができない」(エペソ人への手紙五章五節)とあるように、偶像崇拜を戒めている。確かにある時代に於いて、為政者が自らの支配のために像を刻んだり、巨大な建物を建てたりする事もあろうが、宗教の本質と何ら関わりのない事であろう。信者が間違つて信仰したのである。

日本の仏教史の中で言えば、浄土教から浄土宗へ、更に浄土真宗への歩みは極めて大きいものと言えよう。貴族の仏教が民衆のものとなり、称名念仏や専修念仏といった易行性が追求された段階から更に進み、念仏を唱える事すら行であるとし、一切の行の必要性を否定したのが親鸞であった。正に信の世界への誘いが彼によつて成されたのであり、形あるものから信という心の世界へ、形而上的なものへと止揚したのであった。そして、民衆は、「己心弥陀」という、自分自身の心を離れて阿弥陀仏は存在しないという位置に立つのである。決して、外の宗教とは言えないであろう。

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。」(出エジプト記二〇章七節)とあるように、聖書でも厳に戒めているのである。外にあるものをただ拝んでいる訳ではない事は誰の目にも明



らかであると思われる。

宮本が現実対応の方策の一つとして信仰した宗教は、より一層その範囲を自らに課し、戒めてかからないと、単なるみにくい他宗派批判の域を脱し切れず、浅薄な印象すら与え兼ねない。両刃の剣で、自分に向けられる時は一層深さや鋭さを増すものであっても、一旦その刃を他に向けると否や、ああ又かと鼻につくのである。その狭量さは、宗教と関わりなくと言うより、宗派と関わりなく文学を楽しもうとする一般読者にとって、有難迷惑の何ものでもない。

「ぼくは何もかも自分の中にある、と考えている人間だから……」

ひとりの人間がいて、そのひとりの人間はどうしてこういう父親の子として生まれたのか、どうしてこういう母親の子として生まれたのか、どうしてこんな顔つきで生まれたのか」（同「物語の復権」）

「内も外もつながってる。ところが外なるものは、みんな自分の内なる力によって作動しているということになるよね」（同）

彼の言うところの宿命論を背景にして、人生を語ったり、生死の問題について、愛憎について展開する時、作品は生命を得るのである。

「あなたのせいだ、有馬靖明という男のせいだ。彼が、私にこの清高という可哀そうな子供を産ませたのだ。」

(同「錦繡」)

「清高を見ていると、私は勇気を感じます。落胆して失意に沈むときもありますが、思い直して我が身を奮い立たせて行くと、再び猛然と闘志が湧いて来るのでございます」(同)

自分の不幸を、人のせいにしていた自分の弱さ、愚かさに気付き、そしてその不幸の因が自分自身の業の成せる結果であると認識する。その認識により、力を得、生へ向かうのである。その生は依然の生とは違い、イキイキとした生きた生なのである。

「おいてけぼり」を喰い、傷付き、恨み、耐え、そして遂に乗り越えていくのである。そこには、人を越えた力が働いたり、熱心な祈りが在ったりするのであった。

「自分が、いままさに死にゆかんとしていることを知らないままに死んでいく人間などいないと、ぼくは思う。そうでなければ、人間が死ぬ必要などどこにもないではないか。人間は、そのことを思い知るために、死んでいくのだ。……だが何のために、そんなことを思い知らなくてはならないのか、ぼくには判らなかつた。それを考えると、なぜかぼくは何かに祈りたくなるのだつた。」

(同「星々の悲しみ」)

人智を超えた突然の死を我々はどのように受け止めればいいのか。その事実を厳肅に受け止め、静かに祈るより術がないのではないだろうか。

宮本が言うように、内なる宗教を自ら崇拜、信仰していくのであれば、それは彼の生きる原動力ともなろう。又、彼の作品の創造の上で大いにプラスになるかも知れないし、作品を根底の所で支える力になるかも知れまん。

川の穏やかな水面ではなく、石や岩にぶつかる川底での流れと言えるでしょう。その底流を形づくるのが、因縁であろうが、宿命であろうが。しかし、それが水面にひよっこり顔を出すと、たちまち川の浅薄さを気付かさず、風景全体が台無しになるきらいがある。

今後、川底での荒々しい流れを秘め、清らかでかつ深みのある流れを追い求めて欲しいものである。

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

「書評」編集委員

スタッフ大募集!

～教育文化活動という視点から、日々の世の中を～
見据え続けています。



私たちのやっていることは
可能性への挑戦なんです。

(活動内容：編集会議・各種テーマの学習・討論会)
編集作業・文章の執筆 etc.

興味があれば

いつでも下記までご連絡下さい。

関西大学 組織部「書評」編集委員会
(生協本部3階上る)

TEL(06)387-9998 (直通)

連

載

学校の再建と公立化運動

——在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート

XIV

梁 永 厚

戦後の世界政治のなかで、米ソを両極とする東西の異なった社会体制の国々への対立は、「鉄のカーテン」*、「竹のカーテン」*、「ベルリンの壁」といった東側諸国の西側にたいする国境閉鎖策。さらに東西両陣営は、ともに相手を仮装敵国にして防衛策をねり、軍備の増強と核兵器の開発競争、いわば「冷たい戦争」をエスカレートさせてきた。

※ 「鉄のカーテン」は一九四六年三月、イギリスの首相チャーチルが演説をしたなかで、東側諸国の国境閉鎖を比喩したことば。「竹のカーテン」は、一九四九年十月、中華人民共和国が成立したときに、鉄

のカーテンをなぞって用いられたことば。

冷たい戦争は、イギリスの作家G・オーウェルが書いた『一九八四年』で、いみじくも予見したように、東欧諸国からソ連へとひろがっていった民衆のエネルギーにもとづく民主改革によって、ようやく終局をむかえ東西協調の時代へはいるうとしている。G・オーウェルは第二次世界大戦中に『動物農場』（一九四五年初版）という寓話小説を書き、ソビエト権力機構と全体主義的な体制を批判し、その解決編といえる『一九八四年』（一九四八年初版）によって、権力が民主主義の原則を歪めた



ら、どんな事態が起こるかという警告と、一般民衆のエネルギーは不滅だと称えながら民衆に希望を託した。もう一つ加えると、ソ連の作家イリア・エレンブルクが、一九五四年に『雪どけ』という小説を書き、スターリン治下の暗く重い雪に覆われたソ連社会の市民たちが、スターリンの死（一九五三年三月）を機に、どことなくほつとした解放感を抱くようになり、社会主義体制下の市民のなかで自由を求める感情が広まりつつあることを知らせた。G・オーウェルが予見し、イリア・エレンブルクが自由を求める市民感情を紹介してから、熟成にいたる数十年もの歳月を経て、東欧諸国とソ連の民衆のエネルギーは、民主主義の回復と冷い戦争の終局を導き、東西協調の新しい地平を拓いたのである。

朝鮮半島においても、南北の両国が国連に同時加盟し、南北首相会談において「相互不可侵」の合意書を交わすなど、世界の新しい流れに沿おうとする動きが見えだした。ところが、北朝鮮・朝鮮民主主義共和国（以下共和国と略記）の対内政策は、個人人格化、権力世襲を軸とする民主主義とはゆかりのない冷戦時代的な政策をとっており、やきもきさせられる。それは共和国系の在日朝鮮人団体にも及んでいる。

共和国系の在日朝鮮人団体は、在日朝鮮人連盟（一九

四五—一九四九)、在日朝鮮統一民主戦線(一九五一—一九五五)、在日本朝鮮人総連合会(一九五五—現在)と推移している。そして前二者の一〇年間は日本共産党と提携をした運動を進め、一九五九年から現在までは一貫して本国追従の運動方針をとり、在日同胞大衆のエネルギーが、在日同胞にはあまり還元されない運動を続けており、教育問題についても、日本社会へ宣伝していることと、実際の教育方針との間には大きな乖離がある。

また共和国系の団体の運動は、東側の陣営に属す運動であるとということ、西側に立つ日本政府から抑圧の対象とされ、数々の弾圧を受けてきた。しかし在日に即した自立性の運動理論を立て、開放的、協動的な運動形態をとり、日本社会に認められ得るものであったとしたら、抑圧や弾圧は緩やかになるか、あるいは起こらなかつたとも考えられる。

まえおきのことが長くなつてしまつたが、今回は日本共産党と提携していた時期の運動方針を検証したうえで、学校一斉閉鎖措置(一九四九年十月—十一月)をうけてのち、大阪における学校再建と公立学校化運動を概括することしよう。

終戦まもない一九四五年十月に結成をみた在日本朝鮮人連盟(朝連)は、同胞の帰国を斡旋する自治的な団体

として発足したのであるが、結成当初より在日朝鮮人の日本共産党員が指導部を牛耳るようになり、日本共産党が示した「日本の民主革命なくして、在日朝鮮人の解放はない。」という指針を朝連の方針に組みこみ、日本共産党が展開する闘いの先鋒隊として、在日朝鮮人を動員し多くの犠牲者をだした。

とくに教育問題においては、朝鮮人学校一斉閉鎖措置の弾圧をうけたとき、「日本の国民教育を民主化するために、朝鮮の子どもは日本の学校へいれるべきである。」といった「理論」が、日本共産党関西地方委員会によって示され、在日朝鮮人が多住し、かれらの中に日本共産党員が多かつた大阪、京都などでは、共産党の「理論」を鵜呑みにし、子どもたちを日本の学校へ転校させた。在日朝鮮人の自主的な民族教育を守る闘いを日本の教育の民主化の一部とみなして、そこへ子どもたちを没入させるということとは、民族教育否定の論理即ち民族教育にとつて自滅の論理であつた。この論理の誤りは同胞大衆のなかの誠実な民族的エネルギーによって見抜かれ、後日の学校再建運動の発起となつていった。

さらに日本共産党は、一九四七年十二月に第六回大会を開き、「アメリカ帝国主義の占領下でも、日本の革命は可能である。」と誤つた理論づけをしていたが、この

誤りを理論的に正すことなく、なしくずし的に民族独立闘争を一九五八年七月の第六回全国協議会の直前まで継続した。一方の在日朝鮮人団体は、朝連が団体等規正令の適用をうけて、一九四九年九月に解散させられたあと、少し間において在日朝鮮統一民主戦線（民戦）が結成され日本共産党の極左的な民族独立闘争の一翼を担って、日本民族の独立闘争、米軍基地および再軍備反対などのたたかひをした。こうした闘いに在日朝鮮人をかりたてたために、在日朝鮮人を抑圧し苦しめているのは、日本の反動的な支配権力であるとし、支配権力を倒すことを在日朝鮮人の諸問題解決の環とする論理が用いられた。なお朝鮮戦争を戦っている共和国を守る祖国防衛闘争（在日朝鮮人の非公然組織である祖国防衛委員会と、その実動部隊である祖国防衛隊によって、火焰ビンや薫爆弾闘争の形態がとられた）という、反米軍基地闘争、米軍の特需を扱っている武器、弾薬工場などへのいやがらせをした。

したがって、この時期の朝鮮人教育は日本の教育の民主化というレールをひた走り、「平和と民主主義の教育」「MSA*と再軍備に反対する教育」といったスローガンを掲げ、朝鮮人学校の教育費を再軍備予算をつぶすために要求するといった戦術をたて、最終的には吉田内閣打

倒という日本の内政に干渉するところまでに至った。また公立朝鮮人学校の現場では、教科書の選定において在日朝鮮人が自主編纂した教科書を多用することは、日朝の教師の連帯をこわすという論理がもち出された。

※ MSA || Mutual Security Act || 日米安全保障法

以上のような方針や運動の論理によって、在日朝鮮人が自分たちの子女に朝鮮語と朝鮮の文化や歴史を教えるという、純な民族教育としてスタートした朝鮮人学校の教育は、歪んだ政治主義に汚されるようになった。しかし同胞大衆の中にある民族的なエネルギーは、政治主義と抗いながら、学校の再建をはたしていくが、運動の戦術においては、日本共産党の方針に沿った再軍備予算をつぶすために、朝鮮人学校の教育費獲得闘争や公立学校化運動を組むなどの曲折が続いた。

大阪においては、朝連・民青の解散後、一九五〇年四月に朝鮮人団体協議会を結成し、運動の統一歩調を保ち始めた。朝鮮戦争の勃発後の八月中旬には、旧鶴橋朝鮮小学校にて、協議会を在日朝鮮人統一民主戦線大阪準備会へと発展させる会合が開かれ、十月二十三日、奈良県の「あやめ池遊園地」において、在日朝鮮統一民主戦線（略称民戦）大阪府委員会を結成し、活動を開始した。

翌年一月、民戦の全国組織がつくられ、その傘下の教



育関係組織である教育者同盟、朝鮮人学校P・T・A全国連合会などが活発に動きだした。

一九五一年の夏には、大阪の民族教育の立ち遅れを克服するために、河内市（現東大阪市）若江岩田の金永弼宅で関係者の協議がなされた。民戦の中央から来た李心喆と共産党大阪府委員会民族対策部の幹部との間で、「自主学校の再建」か、「日本の学校の民主化のために同胞子弟を日本学校に在学させる」かの激論が交わされた末、同胞たちの力量が強い地区の小学校再建、小・中・高の体系を確立するために朝鮮高等学校を開設することとなり、十月中旬に奈良県信貴山の寺院の開かれた、民戦大阪府委員会第二回定期大会後の常任委員会で、中西朝鮮小学校の再建と、大阪朝鮮高等学校を旧田島朝鮮小学校に開設すること、校長人事などが決められた。

なお、再建運動については、朝鮮高校は西今里中学校の父兄を中心に、全府下的に基金を集める。中西小学校は地区の大衆的な基盤に立って再建していくという方向が打ち出された。とくに、中西地区における学校再建の成否は、その後の自主校再建の鍵となるものであった。

校長に推された韓鶴洙は、当時、「若干の教員経験はある」というものの教育界には数年間空白であったし、恥ずかしい話であるが、中西地区への道順、地域の事情等

を全然知らない私としては、余り自信がなかったが、活動家仲間にも激励されて受諾した。子供たちも、教員もいないボロ学校へ、校長だけが任命されるということは、普通の常識では考えられないことであるが、これが実情である。校長が赴任して地域の活動家と協力して、父兄を工作し、子供たちも日本の学校から奪還し、教員もさがさなければならぬという条件に、これはなかなか容易な仕事ではないぞと思った……。

東京や兵庫のように、公立としてあるいは私立としてあらゆる困難とたたかひながら、民族教育をつづけて来たのに比べて、大阪は立ち遅れており、これを一日も早く克服し、民族の子供たちに祖国の言葉と歴史を教え、共和国の蓄としての自覚と誇りを持たせるべきだと自覚し、決意をあらたに赴任した。」と語っている。

当時の中西地区は、大阪市の生野区に接した大阪府中河内郡巽町と、同郡加美村の一部からなり、在日朝鮮人四千余名(約六百世帯)が居住している同胞の密集地域であった。この地区の同胞たちは四・二四教育闘争、学校閉鎖反対闘争および生活権擁護、祖国防衛闘争において、いつも先進的なたたかひをしていた。民族教育についても、当時地区内の公立校に民族学級の設置をさせ、課外に母国語の教育を認めさせていたが、同胞

父兄たちのなかには民族学級の限界性を感じとり「われわれの学校を再建すべきである」という思いがつのつていた。

学校再建の運動が始まることを伝え聞いた、巽小学校と北巽小学校の朝鮮人児童は、民族教育を要求して三日間の同盟休校を行い、再建の促進をアピールした。

こうした同胞父兄、児童たちの意識を結集して、一九五二年四月一日に小学校を再開すべく、活動家会議、分会および班会議が繰り返された。これらの会議で同胞父兄たちから出された問題点は、

1 当時、児童十数名が集まる夜学も弾圧されていたことから、日本当局は学校を再建したら必ず弾圧をしてくるのではないか。

2 弾圧されると子供たちをまた日本の学校へ就学させねばならない。朝鮮学校と日本学校を何回も رفتり来たりすると、どちらの勉強も中途半端になるのではないか。

3 日本当局の援助なしには、財政的に運営が困難になるのではないか。

こうした問題点に対して如何に答え、学校の再建へ結集して行くべきか。討論によってひきだされた答えは、要旨次のようであった。

1 こどもたちに祖国の言葉と歴史を教えるために学

校は再建されなければならない。当局が弾圧してくれば、一時的に分散し、分会別に勉強する。場合によつては夜間でもよい。当局が干渉して来ないときは堂々と学校で授業する。要は教師と父兄たちが、学校を守り抜くんだという決意の問題である。現に兵庫県では実力で民族教育を守り続けている。

2 かりに日本の学校でよく学び、優秀な成績で大学を卒業したにしても、民族的自覚や愛国心がなければ、その将来はどうなるであろうか。大学を卒業しても日本人でさえ就職難であるのに、朝鮮人が入る余地があるだろうか。民族意識が薄く言葉も知らないために民族団体や民族企業の仕事にも就けない。

民族教育のなかでは、朝鮮人として進むべき途を悟らせる民族の言葉、歴史、文化のほかに、日本に住むために必要な日常意識や、日本語も十分に教える。

3 教育費は日本政府に保障して貰わなければならない

い 東京の学校や西今里中学校は現に貰っている。

祖国や新中国では、在留日本人子弟のために教育費を全額負担して、日本人としての民族教育を保障

している。

日本の人たちの支援をうけながら、教育費の獲得をして行くべきである。教育費を獲得するまで「新生」を「バット」に切りかえ、三度の食事を一度抜く覚悟でやつていこうではないか。

※ 「新生」「バット」、当時あつた煙草の銘柄。

という内容で、同胞父兄たちの中へ入り学校再建と児童養還（当時、入学児童の募集をこう呼んだ）を訴えた。こうした活動の結果は、同胞たちのなかに学校再建の気運を高めた。

一九五二年三月一五日には、学校設立委員会が結成され、再建運動に拍車がかけられた。再建基金は、各分会に分担され、目標額に近い八万円余が集められ、民戦大阪府委員会からも援助金五万円が届いた。開校のための環境整備が進められ、校舎、校具の補修も進行した。

三月末までには、地区内は勿論、他の地域である生野区舍利寺の夜学で学んでいた児童三〇名が、集団で入学を希望して来たのをはじめとして、通学時間二時間余りのところから、新一年生が入学志望をしてくるなど、三百余名の入学願書が積みあげられた。

教員は、再建準備に加わつて活動をして来た在日詩人の他四名が決まり、校長は新入する一年生の担任をも兼

ねることになった。四月一日、開校式の日がきた。早朝から、二年半の間、とざされていた校門を多くの父兄と入学生がくぐって来た。

ところが、学校の周辺には私服警官が張り込み、学校から三百mのところにある巽警察署には、武装警官が多数待機していた。こうした威嚇のために、入学志願者は半数の一五〇名しか登校しなかった。

入学式は、父兄・来賓たち約二百名が見まもるなかで進められた。喜びと緊張に包まれて式は順調に進んだ。この日を迎えた感動で、学校長の式辞もとぎれがちであった。共和国万歳の三唱でもって式は終わった。学校の周囲を取りまいていた官憲たちは弾圧の手をよう下さなかった。

翌日の『朝日新聞』には、「勝手に小学校を設立」「巽町の一部朝鮮人が」との見出しで、内容は「旧朝連小学校で、北朝鮮系の朝鮮人たちが約百名の子供を集めて学校を開いた……」と報道された。

次いで、大阪朝鮮高等学校の開設であるが、民戦大阪府委員会の援助の下に、一九五二年三月初旬、学校設立委員会が開かれ、開校準備作業に入った。

学校長には、『哲学への意見』という著作もある金承柱が推され、大学出の四名が専任教師として就任した。



四月一日、西今里中学校の父兄、民戦の活動家たちの参席のもとに開校式と入学式が行われた。中西朝鮮小学校と同じく学校の外を警官に包囲された状況で、式が進められた。

この日、入学した生徒は、西今里中学校の第二期生を主力にした三九名であった。西今里中学校の第一期生は、一九五一年三月に、二六名卒業しているが、上級の民族学校がなかったため、進学希望者は、日本の高校へ進んだ。

中西朝鮮小学校と大阪朝鮮高校の再建に対して、大阪府の教育課（私学担当）と大阪府教育委員会は、「学校



の再開は学校教育法に違反している。再開した学校関係者は、速やかに学校を閉鎖し、児童・生徒を在学していた公私立学校へ戻すように命ずる。若し応じないときには処罰される」と通告してきた。

両校の関係者は、対応策として、当時、「私立学校法」にあった「私立学校は開校して三十日以内に申請しなければならぬ……」という条文を盾に、学校法人と学校設置認可を申請することにした。複雑な申請書類については、旧朝鮮中学校の校舎所有者であった岡山学園の書類を拝借、参考にして作成された。

学校法人の名称は、中西小学校は大阪市の東端に接す

る平野のなかに所在しているので「東里学院」とし、また白頭学院と金剛学園が、それぞれ朝鮮の山の名をとっているのので、朝鮮高校は江（川）の名をとって「大同学園」と決められた。

「東里学院」は、宋光孝を理事長に、「大同学園」は、宋応頭を理事長にたてて、法人と学校の設立認可申請書を、四月三十日、大阪府教育課へ提出した。係員では要領を得ず、教育課の磯村課長が応対に現れ「児童たちを日本の学校へ戻してからなら受け付ける」と受け付けを拒み書類に手をふれようとしなかった。父兄たちを安心させるためには、どうしても受け付けを済ませて帰らねばならないと、在日朝鮮人の歴史的立場と現状を述べつつ、話し合った末に、「一応預かる」という答えをひきだし、受け取らせた。

以上、朝鮮戦争のさなか、アメリカの朝鮮政策に従属していた日本当局が、在日朝鮮人に対する抑圧策を強化し、強制追放を目論んでいた時期に、中西朝鮮小学校と朝鮮高校を再建したことは、大阪在住の同胞たちに民族教育の立ち遅れを克服するための、奮起を促す大きな役割をはたしたといえよう。

両校の開校をきっかけとして、同年九月一日には布施朝鮮小学校（校長金厚教、入学児童三七名）、福島朝鮮

小学校（校長姜哲洙、入学児童三〇名）の開校をみた。

そして、翌一九五三年四月には同胞たちが集中的に居住する生野区内において、中川朝鮮小学校（校長裴永漢、入学児童七〇名）舍利寺朝鮮小学校（校長尹和玉、入学児童二四一名）が開校した。

こうして、一九五三年四月現在、民戦大阪府委員会に指導される朝鮮人学校の、児童・生徒数は、小学校、九三六名。中学校、六二一名。高校、八九名。合計一六四六名。教員数は四七名となった。

学校が再建されていくにつれて、日本当局に対し、朝鮮人学校教育費の保障、公立分校化の要望、日本の学校内に民族学級の設置または増設、朝鮮人教師の採用などを求める運動を次の「資料」に述べられているように進めたのである。

資料

「大阪府下における朝鮮人学校問題について」（昭和二十九年四月、大阪府教育委員会事務局学事課）

……略……

四、昭和二十八年度の動き

昭和二十八年年度においては、曾て見ない様の大規模の波状陳情が行われたのがその特色であった。その陳情の趣旨は一貫しているが、指導者、陳情方法等の点から二次に分類することができる。

第一次の陳情

三月一日に、三・一革命三十四周年記念、即時停戦、日本国民朝鮮出兵反対総躍起大会を開催し、決議文を作成して、大阪府知事に手交した。その決議文中に左記の事項が記入されている。

「朝鮮人児童を従前通り就学させ、朝鮮人教員の採用による民族学級を設置し、教育費全額国庫負担による民主民族教育を保障せよ。日本人小学校内における朝鮮人児童に対する中傷暴行差別待遇を廃止せよ。」

1 本年度における陳情の趣旨は、閉鎖された朝鮮人学校を四月一日から開校し、これを公立学校として認可すること。

2 朝鮮人子弟のうち希望者については従前通り日本の学校に就学させること。

3 日本の学校に就学した朝鮮人子弟については、特別学級を編成して民族教育を施すこと。

4 朝鮮人教員を、児童、生徒数四十名につき一名の

割合で採用すること。

というのである。

府教委に対して陳情を行った主なる団体は次の通りである。

1 中西朝鮮小学校を巽町立朝鮮小学校にすることの陳情（三月十六日）

代表、巽町立朝鮮小学校改変期成委員会代表 金正斗

代表、中西朝鮮小学校PTA代表 宋光孝

2 旧福島朝鮮人小学校を大阪市立福島朝鮮小学校にすることの陳情（三月二十三日）

代表 大阪市立福島朝鮮人小学校開設期成委員会代表 呉明烈

3 大阪市立北鶴橋小学校朝鮮人子弟のために教室を提供し、教員を派遣することの陳情（三月二十三日）

代表、大阪市立北鶴橋小学校朝鮮人学父兄代表 韓明奎、金谷海、文景俊、姜竜起、韓光濟

4 布施市北蛇草朝鮮人小学校を布施市立とし、布施市長栄寺と森河内にある旧朝鮮人学校を無条件返還することの陳情（三月二十五日）

布施朝鮮人協議会、在日朝鮮統一民主戦線布施委員会

5 東中川朝鮮小学校を大阪市立東中川小学校の分校にすることの陳情（三月二十七日）

代表、小路、東小路、中川、東中川地区の朝鮮人学父兄代表 金時濟

かくて三月二十七日午前十時頃、朝鮮人約二百名が来庁し、先般各地区毎の陳情書に対し、府教委の正式回答を要求し、教育委員会に面会を強要した。そこで三星副委員長、山川学事課長は、教育委員長室において、中河内郡巽町中西朝鮮小学校長韓鶴洙他二十七名の代表と会見し、その要求に対し「教育委員会としては十分研究し、委員会を開催して、その結果を四月上旬に回答する。」旨を約した。

四月九日午前十一時より、第二委員会室において、先の約束通り、朝鮮人代韓鶴洙以下三十名の代表と会見、府教委側は、北野委員長、木戸教育次長、山川学事課長が出席した。その席上、北野委員長は左の如く回答を行った。

「日韓会談が開催せられ、日韓両国の間に、教育問題についての何等かの話し合いが出来るまでは、朝鮮人学校については現状維持の方針である。従って、

1 朝鮮人児童生徒のみを収容する学校を公立にし、民族教育を施すことはない。

2 朝鮮語の講師の増員も行わない。ただ現在採用している朝鮮人講師については、当分の間これを認める。」

この回答に対し、朝鮮人側は、十分程協議をなし、その結果、

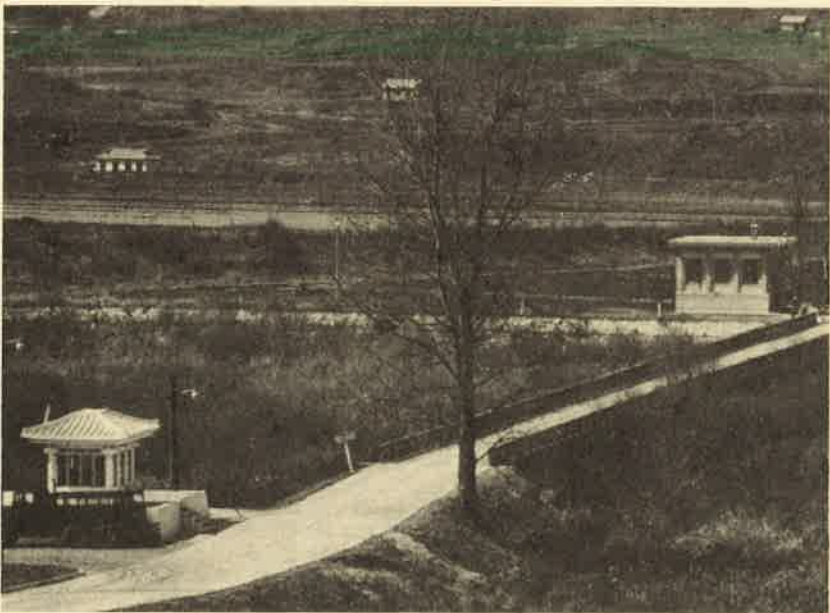
「われわれはこの回答を拒否する。これを直ちにそのまま大衆に伝える。その結果ひき起こされる問題については、すべて府教育委員会の責任であることを宣言する。」と言ひ残して引揚げた。会見は約一時間半であった。

第二次の陳情

四月九日の府教委の正式回答を不満として、その後も波状陳情が行われた。その主なるものは次の通りである。

- 1 七月十一日 舍利寺地域学父兄 三十名
- 2 七月十三日 巽町中西地域学父兄 二十名
- 3 七月十三日 泉北郡学父兄 五名
- 4 七月十五日 布施市学父兄 十名
- 5 七月十六日 生野第一朝鮮小学校学父兄 八名
- 6 七月十七日 福島朝鮮小学校学父兄 八名
- 7 七月二十日 午前九時三十分頃、大阪府朝鮮人学

校PTA連合会会長姜昌調以下代表





二十名が来庁、教育次長室において
 浜田教育長、山川学事課長と会見中、
 三々五々と陳情団が廊下につめかけ、
 約四〇〇名に達したが、午後一時半

退去した。

8 七月二十一日 朝鮮高等学校教員二名 生徒五

名

9 七月二十二日 東成区学父兄 二十名

10 七月二十三日 北河内地域学父兄 二十三名

11 七月二十四日 巽町父兄 二十五名

12 七月二十五日 舍利寺地域学父兄 二十名

七月三十一日午前九時半、各地域の朝鮮人、姜昌調以下約四百名来庁し、教育長に面会を求めたが、教育長不在のため山川学事課長、立住庶務課長が、代表二十名と面会した。山川課長は、「八月一日に教育長と会見することを約するから退去するように」と要求したが、聞き入れず、遂に午後五時十五分退庁時刻を過ぎたので、退去命令を発動し、警視庁機動隊二個小隊が出動し、七時頃退去させた。

これらの陳情は、次に掲げる七月十八日の民族教育防衛大阪臨時大会の決議によって行われたものである。

決議文

一九四九年十月十九日、日本政府は私達の平和で民主的な学校に対し、一方的な不法閉鎖を命じた時、当局は日本学校内に於て、民族教育を約束した。而るに、その

後、私達の度重なる切実な要求に対し、府当局は終始一貫して無誠意極まる態度で自分の約束をふみにじつて来た。その後、大阪市に於ては、日朝両民族の永遠の幸福と親善、そして教育の百年大計の方針により、充分とはいえなが、誠意ある態度と行動を行つてゐる。市当局は、今日七月十八日、大阪市内に在住する八万同胞の学校公立化促進の要請に対し、近日中に実施するための積極的協力を確約した。これに対し、府当局は積極的に支持協力すると共に、府下全般にわたる私達の教育機関に対しても、誠意ある態度をもつて私達の左の要求を速やかに実施されんことを十二万同胞は強く要望すると共に、これの完全実施のために最後まで闘う事を決議する。

要 求

- 一、大阪市内の生野第一、舍利寺、西、港の四朝鮮人小學校を即時公立化させよ。
- 一、大阪府下にある中西、泉北、布施等の朝鮮人小學校を府の指令に基づき即時公立化させよ。
- 一、日本学校の在学する朝鮮児童四十名につき一人の朝鮮人教師を採用し、朝から民主的な民族教育を實施せよ。
- 一、大阪市立西今里中学校の朝鮮人教官を増員させよ。
- 一、不法没収された布施朝鮮人小學校を即時返還せよ。

一九五三年七月一日

民族教育防衛大阪臨時大会

大阪府教育委員長 花岡善三郎殿

これら第二次の陳情に対し、府教委は、姜昌調以下十名の朝鮮人代表を八月六日午後二時、教育次長室に招き、花岡委員長より左記の如き回答を与えた。なお日府教委側は、花岡委員長、浜田教育長、湯川教育次長、山川学事課長、立住庶務課長等が出席した。

回 答

「御申出の件に関して、各方面から検討したが、その要求には遺憾ながら応ずることが出来ないとの結論に到達したので了承されたい。なおこの結論は、政府の態度に変更がない限り、大阪府教育委員会としても変わらないので、承知おかけたい。」

理 由

外国人の教育は、国と国との問題であるので、外交関係が確立して、教育に関しても何等かの相互的取決めが行われるまでは、現状を変更すべきでないとする政府の方針に、大阪府教育委員会は従うことが正しいと考へる。

(ヤン ヨンプ・文学部非常勤講師)

連 載

△研究余滴▽ 象徴主義 7

第2章 象徴主義の先駆者たち

IV ステファヌ・マラルメ (1842~98)

山村嘉己

《象徴主義者》^{サンボリスト}という語が歴史的哲学的な意味を本當に持つとすれば、その名にふさわしいのはまぎれもなくマラルメである、いったのはアンリ・ペールである(ケ・セジュ『象徴主義文学』)。同じ叢書の「象徴主義」でも、その最初のページにA・M・シュミットが「サンボリスムの文学のいかなる研究をするにせよ、たとえ簡略な研究であっても、まず最初に、マラルメの試みにさまざまな企てや意図について手短に考察を加えておくのが妥当である」と述べている。そのマラルメもかれの死のとき

にはそれほど絶大な名声を得ていたわけではない。かれの地位がゆるぎないものになって行くのは、二十世紀に入っても二、三十年、ヴァレリ、ジッド、クローデルのようなかれの人格にも作品にも好意を寄せていた私淑者たちが、文壇に確たる名声を持ち始めた頃からであった。とくにヴァレリの打ち込み方はすさまじかった。ほとんど神秘的といつてよいほど難解なかれの作品がそのためにかえって栄光の虹をかけることになった。その静謐な生活が隠者の風格をかれに与え、その謎にみちた作品はかれを象徴派の聖壇に祭りあげた。フランスにおいてよりも、外国において多くの研究家を誘惑するかれは一九



ステファヌ・マラルメ

五〇年頃に世界的な詩人となり、その錯綜する詩篇の謎はさまざまな解釈の方法を招き入れた。現在、わが国においていろいろな立場からマラルメに迫ろうとする学究はあとをたたない。

このマラルメもつとも対比されるのはランボーであろうが、ともに難解で、ともに超絶的な魅力を備えたこの二人ほど、また真向から異なった生き方——それは人間としても、詩人としてもであるが——を送つたものはまたとあるまい。ランボーを《火の詩人》ととらえれば、マラルメはまさしく、《水または氷の詩人》である。二人は同じ地点に立ちながらまるきり反対の方向に歩み

去った。厭わしい市民社会との接触でも、ランボーがそれを破壊し、力及ばず飛び散って行ったのに対し、マラルメは深く耐え忍び、受容する姿勢を変えなかった。ランボーが言語を解体する見者になり終せたのに対し、マラルメは言語の結晶に精進する修行僧の面影を守りつづけた。しかもこの二人の対照的な詩人は、恐らくもつともきびしい形で、十九世紀後半のブルジョワ社会に対立したのであった。これからこの視点を保ちながら、マラルメの世界に押入ってみよう。

2

「マラルメの超絶的象徴主義は、本来他の象徴詩人たちと同じように、現実に満たされぬ不満の意識から生まれ」(チャドウィック『象徴主義』)。それはとくに幼少時代の悲しい経験である。ボードレールは六歳にして父を失い、母の再婚で苦しんでいる。ランボーも六歳のとき、父に出走され、きびしい母の監視を受けることになる。マラルメにあつては五歳で優しい母がみまかった。かれと妹マリアとは宗教的な雰囲気包まれた祖父母の許で育てられた。一年後の父の再婚は義母の細心の愛情で、マラルメをとくに悲しませたわけではなかったが、さらに十五歳の頃、妹マリアを失うことよつて大きな

打撃を受ける。《死》がマラルメ詩の中心的なテーマとなつたことは周知のとおりである。

病院の悲しさに疲れ　カーテンのいやな白さにもつれ
うつろな壁に退屈した大十字架の方へと
たち登るたえきれぬ香の悪臭にも倦んじはて
陰險な瀕死の病人は　今　老いた背骨をのばし

身を移し、その腐肉を暖めるためというよりは
敷石に降る陽光を見ようとして
美しく晴れた光線が焼くように照りつける窓辺に

げっそりやつれた顔の頬骨と白髭とをすり寄せて行く

そして　青空を焦がれる熱っぽい唇は

若いとき　宝物といつくしむ昔の、乙女の純潔な肌を
せい一ぱい吸いこもつと近づいたように

黄金の生温かい窓ガラスに　苦い接吻を長々とおしつ
けている

陶然としてかれは生きている　聖油の恐怖も

煎じ薬も　柱時計も　病に臥せる床も

忘れて。そして夕べが屋根瓦の上に血を流すとき



『最新流行』第一号表紙

かれの眼は　光明に満ち溢れる地平線の彼方に、

白鳥のように美しい　黄金のガレール船が

緋色の香り豊かな大河の上に

その船列を鹿毛色の豊かな光にゆらめかせ
思い出いつぱいにのびのびと眠っているものを眺める

同様に　ただ食欲だけで食事をする

幸福にひたり込み　幼な子に添え乳する妻にこの唇を
ただ捧げようと頑なに追い求める

そんな心ない人間への嫌悪にとらわれて

私は遁れ、そこからはだれもが人生に背を向ける窓という窓に取りすがる。そして 無限の清浄な朝が金色に染めているガラスの中で祝福され 永遠の露に洗われて

私は鏡に身を映し自ら天使と見 そして死ぬ そして
—— なんとガラスは芸術であり 神秘に満ちている
ことか

私は夢を王冠とかざして生まれ変わりたいと願う
美が花と開く前世の大空に

ああ しかし 悲しいかな 此の世が支配者なのだ。
その執念は時にはこの確かな隠れ家まで及び
私にはき気を催させ そして愚行の忌まわしい嘔吐が
青空を前にして私の鼻をつまませるばかりだ

おお、すでに苦味を知りつくした私よ 手段はないの
か

この怪物に汚された水晶の窓を打ちこわし
羽のねけた二つの翼をかつて逃亡する手段はないのか
—— 永遠の間を転々と落下する危険を冒してまでも。

ここにボードレー尔的色合いを見出すことも不可能ではない。しかし、ボードレー尔的の詩よりもはるかに觀念が顔をのぞかせている。とくに窓ガラスは芸術の寓意として、マラルメの内外に対する意識のあり方をめぐりに象徴している。かれは現世の自らを瀕死の病人と規定しながら、永遠を目ざして芸術の空へ羽ばたくことを希望しているのである。なぜこのように、現世はかれにとつては厭わしい世界なのであろうか。

3

マラルメの生活は母や妹の不幸を別とすれば、表面的には平穩なものであった。六三年(二十一歳)トゥルノン中学に英語講師の地位を得て以来、九四年(五十二歳)の退職にいたるまで時々の休職はあつてもずっと中学校の教員生活を続けている。八三、四年から有名になつた「火曜会」で多くの若手詩人たちの訪問を受けることがあり、隠れた名声はじょじょに拡がりつつあつても、かれの生活の平穩さを乱す事件はほとんどなかった。かれの死(九八年)の頃にはドレフェス事件の波がフランス全土を蔽つていたこともあつて、むしろその秘やかな生涯を浮き立たせるほどであつた。

しかし、教職とほとんど相前後して起つたマリー・

ジェラール (Marie Gehard) との恋愛、結婚、その後の激しい神経痛、頭痛、さらに神経衰弱の発作は数年にわたってかれの心身をきびしく痛めつけることになる(六三年―七〇年)。この間のかれの内面の葛藤や苦悩は想像を絶するものであったようだ。親友カザリスにあてた書簡のいくつかはその苦悩のあとを生々しく示している。

《私は悲しいのだ。凍てつくような、いやな風のために散歩もできないので、わが憐れな脳髓が仕事を私に禁止するとき、私は家において何をしてよいかわからなくなる。

それに、自己嫌悪だ。私は鏡に映る自分のほやけた生気のない顔を見ると、鏡の前から後ずさりしてしまふ。自分が空虚だと感じて泣くこともあるし、頑として白い、わが紙の上に、ただの一語も書きつけることができない。》(六五年一月トゥルノンにて 松室三郎氏訳)

一方、内部を掘り下げ作品を作り出す努力は、その苦しさに比例してますます高まって来る。「青空」の初稿に添えて、同じくカザリスにあてた書簡(六四年一月)、

《アンリ、ついにこの詩を君に送る。この詩をとて

欲しそうにしていたからだ。この数日、私はこれに刻苦精進した。そしてこの詩が私に無限の苦しみを与えたことも、私はかくすまい。——執筆に先立ち、精神の完全に明晰な一瞬を勝ち得るために、自分の痛ましい無能力を打破しなければならぬ苦しみを別として

もだ。
この詩はじつに多くの苦しみを与えた。なぜならば、絶えず脳漿に憑きまとう無数の抒情的なとりつき易い言葉と美辞麗句とをしりぞけつつ、私は執念深く自分の主題の中にとどまっていようとしたりしたからだ。誓って言うが、ここには一語として、私に数時間の探究を支払わせなかったような言葉はない。……)

を見ると、生活上の苦悩と創作上の苦心とが微妙にからみ合せて、それだけにかんたんに晴らしようのない悶々たる悩みが襲っていたことは理解できる。作品がそのことを雄弁に語る。たとえば「青空」を見よう。

永遠の青空のさわやかな皮肉が
まるで花のように 無頓着な美しさで
苦悩の不毛の砂漠をよぎりながら

自らの才を呪う無気力な詩人を圧倒する



『半獸神の午後』挿画

逃れながら 目を閉じて 私は感じる。その空が
打ちのめす厳しい悔恨をもって 私の空虚な魂を
見つめるのを。何処に逃れるのか どんな兇謀な夜を
この嘆かわしい軽蔑の上に 粉々に投げかけようか。

霧よ 立ちのぼれ その単調な灰を空に流せ

秋の鉛色の沼が溺れさせる空に

長い霧のぼろ片をひきながら灰を流せ

そして 沈黙の大天井を築き上げよ。

そしてお前 なつかしの倦怠よ 冥途の池から出て
行きずりに 泥と青白い芦の葉をかき集めよ
決して疲れること知らぬ手で 鳥たちが意地悪く
うがった大きな青い穴をふさぐためだ。

なおもまた、願わくば絶え間なく 悲しい煙突が
煙をふき、願わくば 煤煙のゆらぐ牢獄が
地平線のかなた 黄色く死に行く太陽を

黒く筋ひく煙の恐怖の中にかき消してしまわんことを

—— 大空は死んだのだ —— 私はお前の方へかけ寄る
おお物質よ、

惨酷な理想と罪業の忘却を与えてほしいのだ
人間というおめでたい家畜が眠る

その寐わらを共寐しようとやつて来たこの殉教者にノ

なぜならば ついに私の脳漿は枯れ

壁のすそに 横たわる白粉の壺さながら

すすり泣く想念を飾り立てるすべもなく

まつ暗な死に向かつて陰鬱にあくびをするしかない

だめだノ青空が勝つのだ。鐘の中でそれが歌うのを

私は聞く。私の魂よ、意地悪い凱歌をあげて それは

われわれをさらに恐怖に陥し入れようと声となり

青白い祈りの鐘となつて生きた金屬からとび出してく
る。

青空は昔ながらに霧の中を転がり 狂いのない

剣さながら お前は生まれつきの苦悩を貫き通す

無益で邪な反抗の中で どこに逃れようというのか

私につきまとして離れぬもの、青空ノ青空ノ青空ノ

青空ノ

陰惨な道具立ての中に鋭く美しい光がよぎる。それは

マラルメのあくことなき創作への意欲が苦しい実生活の中
でかれを支えつづけていたことを物語る。そして、その
創作への鏤骨の努力が詩人としてのかれを俗世と決然
と対立させる唯一の保証だったのである。一九〇四年に
発見された『芸術の邪説、万人のための芸術』はその経
緯を明確にわれわれに伝えてくれる。

《神聖なもの、神聖なままでとどまらんとするものは、
すべて神秘の衣で身を包む、宗教は奥義の陰に身を潜
める。その奥義は選ばれた人にヴェールをとる、芸術
にも固有の奥義がある。》

《厳粛で純潔で未知な記号の死の行列》楽譜をもつ音
楽こそ、芸術のなかでもっとも純粹なものなのだ。詩に
も本来この難解性Ⅱ神秘性があったのに、一般大衆を意
識した詩人たちがそれを墮落せしめたのだ。《おお詩人
たちよ、汝らはずつと誇り高かった。さらに誇り高くあ
れ、尊大になれ。》とこの評論は締めくくられる。

恐らくこの孤高の境地をもっとも簡潔に、しかし、つ
よい密度をもって表現したのが「海の微風」であろう。

肉体は悲しい、ああ、私はすべての書を読み終わった。

逃げるのだノかなたへ逃げるのだノ。未知の水泡と
大空との間にあつて鳥たちが酔いしれているのが分か
る。

何ものも 眼に映る古い庭園の数々も

大海にひたされるこの心をひきとめることはなからう、

おお夜よノ素白ましろに守られて空ろな紙に

荒涼とした光を投げかける私のランプも

さらにまた、幼な子に添乳するうら若い妻すらも。

私は旅立つのだノお前のマストを揺るがせる船よ、

錨いかりを上げよ 異国の自然に向けてノ

倦怠は仮借ない希望に追われて絶望しながら

それでもなおハンカチのまたとない別離を信じている。

そして恐らくは マストは嵐を呼びながら

突風に襲われ傾く 難破船上のマストであつて

消えはて マストなく マストなく 豊かな島もなく

……

だがしかし、おお私の心よ 聞け 水夫たちの歌声
をノ

4

以上に述べたような超絶的なマラルメの詩観がもっとも
明らかにかがわれるのは一八九七年刊行の『デイヴ

ァガシオン』に収められた「詩の危機」であろう。これ
は多くの評家が指摘するようにいくつかの小論をとりま
とめたもので、必ずしも一貫した主張が流れているわけ
ではないが、かれの言語観を知るにはもっとも適したも
のといつて間違いはない。

この中でかれは先ず現代を襲っている深い危機に視線
を誘いながら「個性を超越した壮大な空っぽいに破裂
した」「神秘」こそがそれを救う唯一の鍵だとし、昔は「詩」
を歌う人間の口のみが「神秘」を拡けたが、今は「音楽」
のしかも「管弦楽」の力によって大きな部分がとつて代
わられたと述べているが、ここでは言語の問題にかぎつ
て紹介すると、先ず言語のあり方の二面性についての指
摘がある。

《言語のあり方を、素材そのままの直接的なものと、
本質的なものとの二つに分けて、それぞれにちがった
任務を与えようという欲望はたしかに現代のものだ》

直接的とは日常的な《物語ったり、教えたり、さらに
は描写することも加えてそれなりに役立つ》ということ
である。この初歩的な作用はすべて「報道」を目的とし
ており、それに役立てば十分なのである《思想を交換す

るためならば、何も言わずに他人の手の中に貨幣を置いたり取ったりするだけで用は足りるだろう。」

「一般大衆にとっては、言語はまず、通貨のように物の価値をかんたんにあらわすためのものである。しかし「詩人」のもとでは、それとは反対に、言語は何よりもまず人間の心の底からほとぼり出る夢と歌であり、虚構の世界を作るための芸術に材料として使われる必要上、その虚像性をとりもどす。」

マラルメの想定する詩的言語とは事物との直接的な交換を求めず、むしろ《暗示 (suggestion)》、《転位 (transposition)》などの方法によって、日常的偶然性をすて、読者の想像力に直接に働きかけ、純粹の《観念》を呼びさませることである。しかし、それはただの純粹観念ではなく、音響性、含意性などによって感覚にもつよく訴えかける。あの有名なことばが浮かび上がってくる。

《私が「花」という時、私の声は、はっきりした輪郭を何も残さず、すぐに忘れさられてしまう。が同時にわれわれの知っている花とはちがった、現実のどんな

花束にもない、におやかな、花の観念そのものが、言葉のもつ音楽の響きによって立ちのぼるのである。」

(傍点筆者)

《本来、物のもつ音楽性としか関係のない人間の精神を、現実というひとにぎりの埃から解放する》のが文芸の魔法だと別のところで説くとおり、マラルメにとっては、詩は碎かれた人間の精神をその本来の神秘的調和した世界につれもどすものに他ならなかった。このつよい現実拒否と本源的な世界への回帰願望はまさにランボーの「見者」の言語論をまざまざと想起させる。しかし、二人の隔たりはまた歴然としている。ランボーは火と燃えてその現実を破壊し、その作業の中から立ちのぼる新しい言語の生成に立会うことを詩人の努めとした。マラルメは水のように澄んだ眼で今ある現実を観想し、それに詩的言語を対置することでそれ自身独立した世界を作り出すとした。ランボーが破壊によってなしとげようとした現実拒否を、マラルメは忍従による逆転によって実行しようとしたのである。それはランボーが共生のコンミューンの大義にふれ、現実の解体を信じえたのに対し、マラルメは現実の堅牢性について抜きがたいと観念していたことを示している。ランボーが夢破れ、文芸の世界の外へ飛び去ったのに対し、マラルメはむしろ言語の世

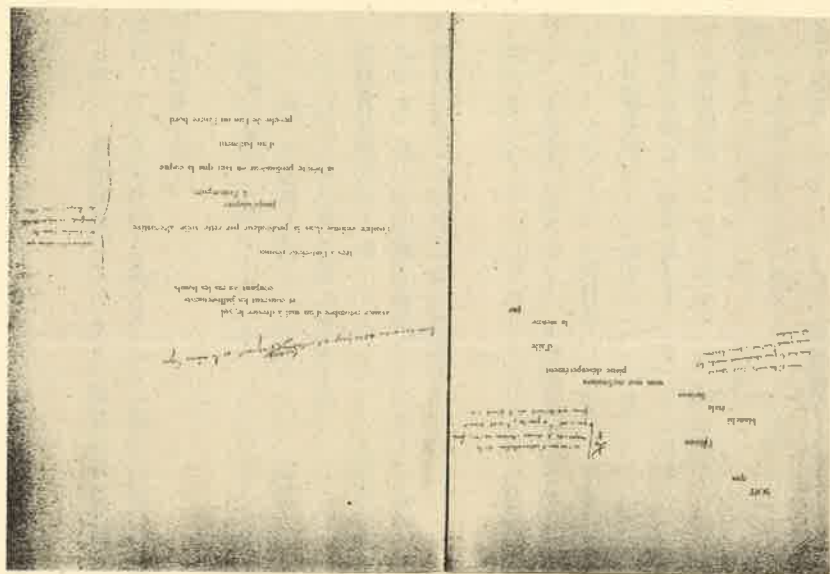
界のより厳しい独立性に徹底的に執着したといえるであろうか。

しかし、詩的言語がこのように純粹な働きを行うためには、マラルメ自身も認めるように詩人自身は消滅しなければならぬ。

《純粹な著作の中では語り手としての詩人は消え失せて、語に主導権を渡さねばならない。語は一つ一つ違っているためにその間に衝突を生じ、こうして、いわば動員状態におかれている。ちょうど宝石を灯りにかざすと、長い光の線が虚像として見えるように、語と語はたがいの反映によって輝き出す。》

詩人はこのようにして語り手として自らを消滅させてでも、日常性に犯されている言語を転位させなければならぬ。なぜなら、《詩句はいくつかの単語によって作られた呪文》のようなもので、これまでの言語にとつてはなじみのない響きをもち、すべての既製の語に残っている偶然性を《一息に否定》し、日常性からの分離を成就するからである。しかし、音楽のように純粹な記号としての音譜を持たないかぎり、この実現はほとんど不可能である。ブランショなどが指摘するとおり（『文学空

間』）マラルメは言語をこれほど絶対的に区別しながら、実は同一の実質を与えているので、日常的言語と詩的言語といっても異質の二つの言語が存在するわけではなく、一つの言語の異なった位相を示しているのにすぎないのである。詩的言語、つまり詩句によっていかに事物の純粹化を計っても、言語自身が現実的意味作用から完全に分離することが不可能であるのだから、音楽における音譜のような完全な自立性を保つことは不可能なのである。したがって、音楽が純粹な音を自由に連続し、流れとして「神秘」を感じさせるのに対し、言語は結局は言語をして語らせることになり、それは事物を消滅させ、不在のものとして呼びもどすが、同時にそれは沈黙を作り出すことにならざるをえない。日常言語が意味を通じればむしろ言語として消滅するのが望ましいのに対し、詩的言語も言語自身に帰ろうとして「不在」を語るといふ結果になる。すなわち、本質を語ろうとして沈黙をひき出さざるを得ないのが詩人の宿命なのである。マラルメの語る創作上の苦悩、とくに《素白の苦しみ》は詩人たることを選んだかぎり、当然引き受けねばならぬ苦しみなのであった。ランボーが自己の精神を錯乱させてまでも新しい言語を創出しようとしたのとは対照的であり、しかし同時に相通じるものであり、本質としての現実が崩



「骰子一擲」の実際

壊しているという認識に立ってしまえば、ともに書記不能という世界に陥ることは当然であった。

ただ、ランボーが結局は身を以て新しい現実へ挑もうとしたのに対し、マラルメは最後まで詩人としてこの世界の虚無性に対して挑戦することをやめなかった。それが有名な《書物 Livre》の計画である。それは最後は《世界は一卷の美しい書物に到達するために存在している》（書物・精神の楽器）と宣告するまでに到っているが、それは《まるで〈大きな作品〉（化金石）の炉に火種をたやさないうために家具も家の大梁もくべてしまつて錬金術師》（ヴェルレーヌへの手紙）のように何十年もかけて試みてきた《書物》で、《それはわれわれの最も美しい夢の数々に酔う人間の説明》（演劇について）であるが、いろいろ人々の眼にふれてきた諸作品のほかにいつも試みてきた企てであることを隠してはいない。それが最終的にどのように創出されようとしていたか。「骰子一擲」などにその一端はのぞきえても、結局は完全な姿を把握することは不可能なのである。ただ《書かれるべき一冊の書物としての世界》とは詩人マラルメが身を以て現実世界に對置しようとした《現代の神話》であったのだろう。この神話の中でこそ、人間は本質的に自由に豊かに自らを生き得るのである。

以上のような分析をへた今となつては、かれの《折にふれての (de circonstances)》詩作品に実際にふれるのは空しくすら思われて来るが、それでもかれが自らの作品につねにたゆまぬ改訂を加えていたという事実は、かれの宣言にもかかわらず、マラルメは自らの作品をつねに一つの完璧な世界にするべく心掛けていたことを示すので、《僕は死んだ。そして蘇った。僕にとつて最後の精神の小匣を開く鍵、宝石を鑲めた鍵を手に。》(オーバネルへの手紙)とまで誇った「エロディアド」。《主題は古代的だが一つの象徴》(ルフエビュールへ)ともうした「半獣神の午後」など多くの作品にふれねばならないが、今は残念ながらその余裕をもてない。最後に、二十年もかけて創り上げたかれの特色をもっともよく示すといわれるソネット「己れに関する寓意詩」を紹介して一先ず幕をとじることとする。

その清らかな風が高々と 縞瑪瑙をかかげながら
 苦惱はこの真夜中、聖火奉持者として
 不死鳥に焼かれた多くの夕べの夢を支えている
 その夢を納める骨壺がない

空ろなサロンの飾り棚の上には、それに法螺見もない。
 それは空しく鳴る空間のこわれた骨董品、
 (というのも、部屋の主人は三途の河に涙を汲みに
 行っているから
 この虚無がただひとつ誇りとするものを持つて。

しかし北に開いた窓枠に近く 一つの金色が
 閃いている、恐らくは水の精に焰をふきかける
 一角獣の壁飾りのせいか。

かの女は 鏡の中で裸身で息たえたもの それでも
 その枠に閉ざされた忘却の中で たちまち
 きらめきの七重唱が定着する。

チャドウィックのこの詩に対する評価は驚くべきものだ。それはマラルメに抱く現代の批評家の讃嘆を代表するものであろう。かれはこの空虚な部屋は明らかに詩人の内的世界の象徴と観じ、鏡によって空虚さを強調していることにふれながら次のように解説している。

したがってマラルメはこの壮麗なソネットにおいて、
 かつてカザリスに宛てた手紙に書いたことのある「か

つて自分であつたものを介して精神的宇宙に属するものを見、己れを發展させる能力」と化したことを語っているのだ。だがこの不在の世界を創造するために刻苦勉勵している彼の作品がいかなるものか、何らかの暗示を彼は与えている。たとえば大熊座の名は一度もあげられていないし、「星」という言葉さえ用いられていない。それゆえある意味では、最後の行において鏡に映するのが大熊座の星座であるといってしまうのは誤りかも知れぬ、実際にそこに映るのは、マラルメの作りだした七つの輝く光りの点、われわれの知っているいかなる天体にも存在しない七星なのだ。さらにマラルメは、虚無の部屋の鏡に映じた七つの神秘的な光の点を視覚的な映像によって表現しているばかりではなく、聴覚的な手段によつても同様の印象を伝えようとしてゐる。その脚韻構造は驚くべき技巧を駆使して構成されており、もっぱら *sonnet* の二つの脚韻によつてまとめられている。ひとつは第一義として「黄金」の意味を持ち一般に黄金郷、黄金時代のように理想世界の象徴と解される。そして他のひとつは、ひろく未知なるものの象徴とされる文字 X のフランス語による音記である。したがつてマラルメは、虚無から立ちのぼる広大な星晨の視覚的映像ばかりでなく、この

詩全体を一貫してつらぬく *sonnet* の交錯による聴覚的手法によつても同じ印象を伝達しようとしているのである。(『象徴主義』「マラルメと無限」倉智訳)

評家をこのような壮大な知的営為に誘うマラルメの力のすばらしさ。それを好むと好まざるにかかわらず、マラルメのこの《驚異》をだれしも認めねばならぬだろう。ただ、翻訳ではその魅力は大半失われることも痛惜の念を以て納得せねばならぬだろう。

(やまむら よしみ・文学部フランス文学科教員)

連

載

日本中国ことばの来往ゆきぎ

その43

周作人と周辺の人びと

——一九四九年以後における——

芝田稔

本誌第八〇号に、当時中国に起こりかけていた周作人に対する再評価機運を取り上げて、私の周作人にまつわる思い出の一端を掲載したことがある。以来気掛かりになつていたものの、その後の消息が得られないまま、いつの間にか四年半の歳月が過ぎていた。あの時は『随筆』一九八六年第六号に掲載されていた舒蕪の『試談周作人』を読んだのが、執筆の切っ掛けであつた。今度は同誌一九九一年第五期掲載の文潔若の『一九四九年以後的周作人』が、私を捕らえて放さないものである。そこには周作人周辺の多くの文化人や学者が出入りするし、そのうち何人かの先生とは曾て北京で面識があつただけに、一層

私の関心を唆るそそのである。

周作人は抗日戦争中、日本に協力したことは事実である。一九四五年八月一日、日本軍の降伏後間もなく逮捕され、一時北京監獄に勾留されていた後、南京の老虎橋監獄に収監されていた。四六年一月南京高等法院は十四年徒刑の判決を下した。ところが、この判決は余りにも不当な判決であるとして、兪平伯、沈兼士ら十五名の文化界の名士たちが連名で減刑嘆願を行った結果、徒刑十年に減刑されたのであつた。

しかし当時中国は国共内戦が避けられない不穏な情勢

にあり、時局は緊迫度を増していた。そして四九年一月二六日周作人は仮釈放されることになった。その当日彼は南京の友人馬驥良宅に一泊し、翌日には尤炳圻（周作人に師事、日本留学、元北京大学教授）親子に迎えられて上海へ同道、尤宅に落ち着く。

その頃の周作人は、台湾へ行く意志をもっていたようである。これは釈放になる少し前のことであるが、愛弟子の尤炳圻が周作人の意を体して洪炎秋に寄越した手紙によって明らかにされている。洪炎秋はいう。

尤炳圻から来た手紙には、周先生は台湾へ行きたくはありますが、落ち付く先を考えていただけないかということですが、とありました。私は旧友の医師郭火炎君に相談したところ「北投（台北の地名）の別荘に住んでもらってよろしい」と心よく承諾してくれましたので、そのことを尤君に伝えると同時に、生活費は私と旧友の張我軍（日本留学、元北京大学日本文学科教授、戦後台湾へ帰郷）とで責任を持つことを約しました。しかし釈放後も周先生は台湾へ行きませんでした。やがて消息すら立ち消えてしまいました。（これは洪炎秋『私の知っている周作人』香港『純文学』第一巻第五期、六七年八月号の注釈による）

それはどうしてなのだろうか。

その年の八月一日付上海『亦報』によると『周作人北京行きを決定』という一文の中で「胡適や朱家驊から南下して教授職に就いては、との勧めもあつたようだが、周作人はこれを断りつづけ、いまなお上海の門下生尤某宅に身を寄せている」と述べ、彼は香港か台湾へ出る機会を失ったのではなく初志を変更したのであると結んでいた。

宜なるかな、その翌一二日に周作人は尤炳圻に伴われて第二の故郷である北京へ出立、北京でも先ず尤宅に落ち着き、周囲の情勢を窺っていたが、もはや家族に迷惑のかかる心配がないことを見定めてから、八道湾のわが家へ帰ったのである。それは一〇月一八日であり、長男の周豊一（北京図書館在職）が迎えに来たのだという。

周作人はわが家に帰り、一九一九年以来住み慣れたタミの居間にくつろぐことができた。だが『毛沢東選集』が名指しする漢奸の字が消えない限り公民として認められないという悲哀が待っていたのである。

それは五三年の第一次総選挙の際に如実に現れた。北京の住宅街には例によって赤紙に墨痕鮮やかな有権者名簿が貼り出されていたが、八道湾十一号の周家の欄には周作人の姓名は無く、夫人（周信子）の名前だけが光って



いた。周作人は政治上の身分では、日本人妻にも及ばなかったのである。彼はその後裁判所に対し選挙権取得の申請を行ったけれども、遂に批准されずしまいに終った。周作人は四九年一月釈放されたが、それ以来固定給料はなく、また公費による医療も受けられなかった。日常生活費は翻訳と魯迅を回顧する文章によって維持するしかなかった。五〇年代に入ってから息子周豊一の嫁張莢芳が勤めに出ようと提案した時、周作人は「快く賛成したのだが、信子夫人は『家庭夫人は職業を持つてはならない』という古い仕来り」を守り、頑として許さなかった。しかし現実には勝てず、遂に中学教員となって働くことを許したという。そのおかげで数年後周豊一が右派分子に決定され、給料が何級も降格された時も、また六六年五月人民文学出版社が毎月周作人に与えていた原稿料の前払いを停止した時も、張莢芳の細腕に頼らねばならなかった。周作人存命中最後の一年間は全く嫁の給料（當時、月給七十元）におんぶされていたという状態であった。

こうした境遇の周作人を毎月のように慰問していた旧友がいる。錢稻孫と徐祖正（東京高師、京大卒、元北京大学英文学科主任）の二人で、西郊の北京大学からバスで城内の周宅までよく通ったものである。

錢稻孫といえは万葉集の漢訳やダンテ「神曲」の翻訳で知られ、特に日本古典文学の翻訳では有名。外交官の家に生まれ幼時から東京で育ち、慶応幼稚舎、成城学園卒、ローマ大学卒という学歴からも分かるように、日本語は当然、伊、仏、独、英の各国語に精通した教育者、翻訳家であった。私がお会いできたのは四一年から四五年までだったが、先生の日本語は真正銘の標準語であり、中国語も南方訛りがなく、聞き易い「官話」であった。

六二年の清明節（四月五日）後間もなく、周信子夫人が亡くなった。錢稻孫が弔問に伺った時周作人は「信子が臨終の時に話した言葉は、日本語ではなく、紹興の言葉でしたよ」と大いに感激して語ったという。

また時には酒の小瓶と簡単な肴持参で周宅を訪れる。

錢稻孫は独酌で、ちびりちびりやりながら、老人の回顧談を始める。周作人は酒の相手などすることなしに、ただきつい紹興訛りで相槌を打つ。この談笑が彼の憂愁を発散させる又とない贈り物であった。

周作人は蔵書家で、殆どが綾装本であり、自宅中庭に面する三間通しの西側母屋を書齋に当てていた。中庭が低くて雨季になるとよく水浸しになるので「苦雨齋」と命名し、その扁額は沈尹默（京大卒、新青年を編集、北



京大学、燕京大学教授、詩人）が揮毫したものであった。解放後この額は多くの書籍と共に没収されて今は無い。周作人は四九年以後、書籍を買う余力など無かったが、旧友や日本岩波書店から寄贈を受け、彼が死亡するまでに数千冊にも達していた。暇があるとその中の書籍を繕っていたが「冷飯をいためているところだよ」と冗談をいうこともあった。

だが文筆生活最後の時が訪れた。

紅衛兵が家宅捜査を終わると、彼の居間を封印し、彼を雨漏りのする台所へ押し込めて、外出禁止を命令したのである。その上に当時「黒幕の頭目」とされていた周揚（文学理論家、左連書記、文芸講話以後の理論的指導者）の罪過を文章に纏めて提出せよと迫る。周作人の筆記用具は毛筆であるが、すべて封印された居間に在る。ペンやボールペンでは書けない。そこで張莢芳が中学生用の硯や墨、筆等を用意してきたが、台所には机や椅子がない。止むなく粉をこねる板を机に代用して、その報告を書くしかなかったのである。それは希代の文豪が世を去って行く最後の執筆風景であり、物寂しい、物悲しい限りであった。

周作人はその年の九月と十月の二回にわたって嘆願書を書き公安局派出所へ提出するよう張莢芳に命じている。

文面は二回とも略同様で次のようなものであったという。共産党は日頃から革命を最も重んじる人道主義者であります。私は已に八十歳を越えており、これ以上長生きしましても、徒らに家族に負担をかけるだけであります。公安当局におかれましては、どうか私に睡眠薬を服用して安楽死の道を選ぶことができるようお取り計らい下さい。

この嘆願書は、最初の分は派出所に届けられたが、大海に石を投げたも同然、誰も取り合ってはくれなかったのである。二回目、紅衛兵の監視が厳しいため張莢芳は、本の中に挟んだままにしていたが、その後何回も捜査を受けているうちに、紛失してしまった。

一九六七年四月末であった。周作人は会う人に対し、こんなことをよく言ったそうである。

私はもうこれ以上家族に迷惑をかけたくないので、とりわけ張莢芳には、余所から嫁いで来た人に、こんな苦勞をかけて、本当に済まなく思っているのです。

そして五月六日午後、誰もいない台所で周作人は息を引き取った。長男の周豊一がかけつけた時には、已に氷のように冷たくなっていたが、「私は僧侶の生まれ変わりなんです」と彼が口癖のように言っていたように「視

死如婦”全く安らかな大往生であったという。

周作人は一九四九年以来三十年間、漢奸と評されつづけて来たのであるが、七九年以降に変化が起こり始めた。“反革命”分子と烙印を押された人びとも名誉を回復されたし、“右派”分子も殆どその処置は誤りであったことを認められた。人びとの周作人に対する見方も次第に複雑化してきたのである。抗日戦争時期の無節操ということによって“五四”新文学運動の先駆者であったこの人物を、完全に抹消してよいか否か？

こうした情勢の中で周作人に対する種々の資料が公にされるようになった。中でも元中共北京特別委員会書記後山西省政治協商会議副首席王定南及び事情通の回顧論文や採訪記録によると、周作人が当時日本側の職務に就任したのは、新民会（日本軍に協力した政治的外郭団体）の繆斌を牽制するためであったといわれる。華北総署教育督弁湯爾和の死亡後、その席に繆斌を補する動きが起こっていたからで、王定南が周作人の出馬を要請し、就任に際しては「積極の中に消極、消極の中に積極」という二原則を指示してあったというものである。

しかし周作人自身はどうであったのか、鮑耀明に宛てた書函で大要次のように述べている。

教育督弁についていえば、脅迫を受けたこともない

し、また自発的でもない。勿論日本側から誘いを受けたことがあるが、私は熟慮の結果返答した。こと教育に関しては、他の誰よりも、私が出馬することによって、反動傾向を少しは抑制できると思つたからだ……。

周作人と錢稻孫との関係は、一九〇八（明治四一）年周作人と錢玄同が日本留学に来た時から始まる。玄同は稲孫の叔父に当たるが、年齢は同い年である。帰国後周作人と錢玄同は北京大学教授として『新青年』誌上に新文学運動を提唱した先達であり、魯迅に同誌へ投稿を勧めた最初の人が錢玄同である。戦時下に周作人が教育督弁となり、錢稻孫が北京大学校長になったのも東京時代の昔から深い知己であったからであろう。

周作人と錢稻孫は、ともに日本に協力して国家に背いた漢奸として処罰された。錢稻孫は八〇年代に入つてもなく無罪としてその名誉が回復されている。しかし、それは本人の存命中でなかったことが悔やまれるのである。というのは六六年の文革初期に、全身に傷跡が残る程紅衛兵に殴打されたのがもとで、数日後に死亡したといわれているからである。中国文人特有の馬褂を着用し、柔らかな物腰、包容豊かな優しい眼差し、そしてやや掠

り気味だが低音のよく通る太い声が、五十年前、北京沙灘の文学院のあの「紅樓」とともに今尚私には焼き付いて離れないのである。

一方周作人は紅衛兵の殴打こそ免れたが、それも指揮者の女学生が要求した腕時計を、機転を利かせて家族が与えたからであった。周作人は已に五二年満六十六歳になった時の日誌に「寿則多辱」を書いている。この頃から「長生きは恥の元」と諦観していたようであるが、八十歳になった時、それを遊印にまで刻ってもらっているところから見ると、長寿無聊を詫ちながらも、遊び心を持つ中国文人の姿が窺えるのである。

錢稻孫は已に名譽を回復されている。周作人にも再評價の機運が起こったことは事実である。だがその名譽回復については寡聞にして未知である。何れにしてもこのお二人は日本側に協力した故を以て祖国から公民権を剝奪されたまま世を去った人たちである。政治ほど苛酷なものはない。政治的遠慮に欠けていたからだといえは、それまでである。だが長い長い文化交流という視点に立てば、二人が日中文化の交流に残した業跡の光芒は、二人以上に優れた文化人士が出ない限り消えることがなく、何時までも一隅を照らしつづけるであろう。

(しばた みおのる・元文学部教員)



■短評■
『国境を越える労働者』

桑原靖夫

岩波新書／定価五八〇円
(消費税込)



一九八九年に多数の擬装難民（経済難民）が日本列島に押しよせたことは、未だ記憶に新しい。マスコミが一斉にこの問題を「突然の出来事」として取り上げた。政府は、また世論全体としても、その迅速な対応が急がれ、ジャーナリストイックに「開国論」と「鎖国論」というそれぞれ立場から、議論が上がった。結果として、ほぼ「鎖国論」に立ち、固定した「不法就労者概念」などを盛

り込んだ入管法の改正へと動いていた。

現在の大規模な国際的人流、なかでも労働力の移動は送り出し国と受け入れ国の双方にとって、大きな課題であり、日本について語られる「内なる国際化」という方向性にとっても、その根幹をなす問題であろう。

この本で著者が提起しているのは第一に、世界規模で展開している労働力移動をそのままグローバルな全体像として把握すること。そして、第二には特に受け入れ国の政策いかんが、「人流」の規模は勿論のこと、送り出し国の経済状況や社会構造、つまり一国の労働力基盤をも左右してしまうこと。そういったことを、移民や出稼ぎが始まった頃から歴史の変遷をも踏まえたうえで、送り出し国、受け入れ国それぞれに起きている問題へと立ち帰っていく。

日本の入管統計からも、入国者が

ほとんど地球全域からやって来ていることが分かり、グローバルゼーションという視点は確かに不可欠だといえる。貧困人口が十一億人を越えるとも言われている今日の世界において、先進国だけがその豊かさをのんびりに享受していることは出来ない。この問題はまさに、地球という全体像を描かないと解決できないと言っても過言ではなからう。

ただ、このところ頻繁に使われているこのグローバルゼーションという言葉自体ひとつの方向性を示しているとは思いますが、同時にこの言葉は非常に曖昧な言葉として語られてはならないか。

さらに言えば、本書における問題意識は国家間レベルに向けられるべき内容であると思われる、私達市民レベルで考えた場合にどうしても浮遊した感がまぬがれない。市民レベルとして、私達が彼ら外国人と共に働

き、一つの社会で共存していくことの意味を卑近なところから模索していくことが優先順位からいって順当ではないか。ここから出発することは「内なる国際化」の議論そのものに他ならない。

しかし、外国人労働者受け入れの問題を語る時、日本人は既に置き忘れてしまっていることがある。それは在日韓国・朝鮮人の存在であり、彼らが日本社会から拒否され続けているという事実だ。既に時間が経過しているこの問題には、ただひたすら目をつむり続けようとし、降って湧いたかのような難民の問題だけをとりあえず解決しようとする日本人に、どれだけ受け入れに対する受容力があるのか。まったく疑問である。

また、国際化や民族問題における議論のなかで、必ずといっていいほど出てくる単一民族幻想論だが、まだまだ日本人が意識の中で払拭でき

ていないと思えるニュースが最近飛び込んで来た。茨城県で外国人が日本人に対して連続して暴行事件を起こしているという噂が広まったという。しかし、真実はまるっきりのデマであったことが分かったのだ。このニュースを聞いて、関東大震災の時に朝鮮人に対する偏見に満ちたデマが流布したという史実を想起してしまった。

外国人に対して、一義的なレッテルを貼ってしまうことによつて起こったといえるこれらの「事件」は、未だに日本人の意識構造の深層に排外性や差別観念を引きずっている現象として受け止めたい。

「国家間」だとか「内なる国際化」といった「国境」を意識した言葉を連ねたが、本書でも強調している動く国境線あるいは国境の希薄化の問題には耳を傾けるべきだろうと思う。つまり、「国家」自体が既に括弧付

きの状況であるということだ。現行の入管法では、外国人の長期滞在については厳しく取り締まることを前提としている。これは「国家」内部における秩序維持のための管理システムとして作用する。しかしそれゆえに、いったん入国した外国人は様々な不都合に出くわし、時には人権を脅かされる場面に遭うこともある。窮地に立たされた人々が国境をひとたび希薄化させるに伴い、国家は倍以上の圧力をかけ、国家としての枠を強調しようとする。

上野公園に群れをなすイラン人たちは「リトル・テヘラン」という、日本において社会的に統合を拒絶された小国家を形成する。いかに平等に彼らと共存できるかという構想を政策として反映させるとともに、私達の意識の改造こそが最大の道標になることを繰り返し強調したい。



■短評■

「有害」コミック問題を考える

置きざりにされた「性表現」論議

月刊「創」編集部編集

創出版／定価二〇〇円（消費税込）

「セックスコミック」「ポルノコミック」と一方的に名付けられたマンガが新聞・テレビといったマスコミで頻繁に取り上げられてきたのは90年頃からであった。小学館発行の「ANGEL」等露骨な性表現を描くマンガを、市民団体等が「青少年に悪い影響を及ぼす」「有害」なものとして「子供の世界からなくす」「性描写から子供を守る」ために、自治体、政府への法規制を求める運動が

盛り上がりつつあった。それに伴った形で各自治体の「青少年健全育成条例」によってコミックの「有害図書指定」が続々と行われた。それは、書店に対して、青少年への販売自粛、成年コーナーを設置し、指定された本をそこへ入れることを定めている。

こうしたコミックへの規制に対して出版社は自粛の姿勢で、指定された本の出荷停止、返品要求と断裁を行い、「成年コミック」マークの表示を行った。

そして、ついに91年春のコミック同人誌を販売していた書店を警察が摘発し、逮捕者を出したのをきっかけに、書店、同人誌作者、発行人等が検挙される事態が起こり、12月にはパソコンゲーム製造会社の摘発へと、警察による介入の度合いは深く進んできている。

本書はこうしたコミックをめぐる表現・出版の自由の問題や子供、見

落とされた「性表現」について、規制を求める側からフェミニストまでを含め、「有害」コミック規制運動の疑問性と危険性を明かす本である。

法規制を求める住民運動は「子供を守る」という美名の下でコミックの排斥を行っているが、「子供を守る」それ自体に矛盾とまやかしがある。有害図書指定は18歳未満への規制であるが、「有害」とされたコミックは大抵が性に関心を持つ年代向けであり、中・高校生、青年が読者だといえる。こうした年代にとって「性」は重大なテーマであり、マンガにおいても同様だ。それを十握ひとからげに「子供」としてしまえばまやかしではないか。そして、性描写がどのような文脈の下で描かれているのかを無視して、単に「性描写が露骨だから」「有害」コミックを追放する（現実には、書店は縮小している）ことは真に「臭いものには

「フタ」であり、青少年を「無菌」にしておけば問題はないという考えではないか。それは、親と子供との直接の対話や、家庭・学校でなおざりにされ、語られない性教育の「サポータージュ」に対する責任転嫁だ。コミック追放は警察権力の行使を現実

に招き、逮捕といった摘発により「有害」とされた本の販売自体の停止を威嚇した。それは権力の恣意的な「有害」指定が性的内容に限らず商品販売の自粛の形で、事実上の発禁処分と同じ実効力持ち得ることを実証した。

こうしたコミック追放運動はマスメディアへの法規制を狙った締め付けの一つの周期という面もある。しかし、「ポルノコミック」という呼ばれ方にもあるように、89年の幼女連続殺人事件が非常に大きな原動力になっているのではないだろうか。現に「有害」とされる一因として、

警察はコミックが犯罪・非行の起因となった事件を挙げており、新聞はそれを鵜呑みにした報道を行っている。

しかし、コミックが原因で非行が増えたとするデータもなく、非行のきっかけとされるコミックのみが問題視されるのは論外だ。個人の環境なり育成史といった背景を見ることなしにコミックのみに原因を帰し、コミックの排除を行うことは短絡的思考でしかない。

さて、『少女ポルノコミック本』が「有害」だとして書店から追放されているが、はたしてなにがなぜ「有害」とされるのだろうか。今回のコミック追放の理由は、「一部の少女向け雑誌、単行本等に露骨な性描写や粗暴性、残虐性を誘発、助長する内容等青少年の健全な育成を阻害するおそれのある」（総務庁の文書より一部抜粋）ためである。しか

し、「有害」とされたコミックに確固とした基準がなく、現実には、規制者の恣意的な判断によっている。

「健全な育成」とは、「性」を子供達に隠し、神秘性を持ったものであけつぷろげにしてはならないという考えである。コミックはそうした伝統的な「性」が打破されつつある現状の反映ではないか。「子供は純真であるべき」という大人の一方的枠組みが、従来から隠すべき神秘なものとしての「性」をあげつぷろげに描くコミックの追放を公権力の規制で行うことを求めている。つまり、「有害」とは、子供にとってそうではなく、大人社会の「大人」たり得る最も主要な要素である「性」の秩序をおびやかすために「有害」なのである。「有害」とは何と傲慢な言葉であることか。

（川野 旅人）

■短評■
「娘に語る祖国」

つかこうへい 著

光文社 / 定価八五〇円
(消費税込)

本書は、在日韓国人の筆者が四歳になるお嬢さんに飾らない言葉で「民族」を語りかけている愛の書である。

筆者自らの生い立ち、ペンネームの由来、結婚に至る過程を通して、「民族」を考えていく。民族差別や韓国籍ゆえに日本人女性との結婚の困難を経験し、やがて誕生するみな子さんの国籍をどうするかで筆者はとても悩むことになる。結局、筆

者はみな子さんの国籍を日本にするのだが、そこには、娘の幸せを一途に願う父親の愛情と民族への苦悩が痛いほどこめられている。親子でありながら国籍が異なるのだ。筆者がどれほど大きな決断をしたかがよくわかるだろう。こういうケースは決して珍しいことではない。国籍が大きな問題を引き起こしている現状がここにある。

しかし、民族や国境を越えて筆者のみな子さんに対する愛情はあふれんばかりである。みな子さんが誕生した年に、芝居の演出をするために初めて韓国を訪れた筆者は、物事に対する考え方、風俗や習慣に驚き、とまどいながら「祖国」を体験していく。日本と韓国という歴史的に複雑な過去を共有する二つの国の間では現地の人と心を通わせるのに時間がかかった。数々の困難を乗り越え、舞台が成功して日本に帰国する時、

筆者はみな子さんを日本国籍にしたことに間違いはないと確信する。この確信は、国籍は関係なく人間と人間のふれあいの中から生まれたものだろう。

本書の最後で筆者はこのように述べている。

「みな子よ、きつと祖国とは、おまえの美しさのことです。

ママの二心のないやさしさのことです。

パパがママを愛しく思う、その熱さの中に国はあるのです。

二人がおまえをかけがえなく思うまなざしの中に、祖国はあるのです。」

——とても味わい深い言葉であると思う。
(社会学部 若紫)

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内「書評」編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線4821)

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行（二五〇字）を一枚と計算します。

▼枚数は自由。（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。）

▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入



編 集 後 記

「書評」98号をお届けします。

男女雇用機会均等法が制定されて6年目を向かえる。活発に働いているキャリア・ウーマンがクローズ・アップされているが、果たして、現実にはどのような状況なのだろうか。

企業の「労働者不足」の深刻さに、男性だけでなく女性も労働力として活用していかなければ「生き残れない」ということなのだろうが、過労死の存在する企業において、男性にとっても、女性にとっても、よりよい環境のもつとで、平等な雇用とは何かを、問いつづけていかねばならないだろう。

さて、前号にて、池田浩士氏の連載「小説の中の異境」が、序論で最終回となりました。しかし、今号から、過去の出版物を今、現在の視点からみるという意味で、連載「故編追望」が新しく始まる運びとなりました。

今後とも「書評」誌では、活発な活動を行いますので、さらに注目し、また、執筆、「書評」活動を私達と一緒にしてみたいと思われる方は、ぜひ一度御連絡をお待ちしています。

季刊『書評』 1992年1月 通巻98号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部『書評』編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 〈内線4821〉 or 387-9998)
頒 価 250円